

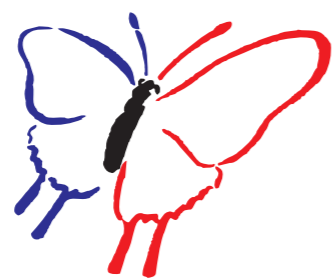


# INFOS

日仏整形外科学会広報誌 **アソフォ**

■名誉会長……………七川 敬次      ■会長……………小林 晶      ■副会長……………瀬本 喜啓  
Président d'honneur — K. SHITIKAWA      Président — A. KOBAYASHI      Vice-Président — Y. SEMOTO  
■書記長……………大橋 弘嗣      ■書記・会計……………青木 清      藤原 憲太  
Secrétaire général — H. OHASHI      Secrétaire et Trésorier — K. AOKI      K. FUJIWARA  
■幹事……………坂巻 豊教      金子 和夫      安永 裕司      久保 俊一      ■名誉会員……………小野村 敏信  
Membre exécutif — T. SAKAMAKI      K. KANEKO      Y. YASUNAGA      T. KUBO      Membre d'honneur — T. ONOMURA

■事務局：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院内（係：大橋弘嗣）  
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339  
Bureau : Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON  
■発行所：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院（編集者：大橋弘嗣）  
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339  
Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON (Éditeur : H. OHASHI)  
■ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp



2013.3.31  
VOL. 23

## 2013年を迎えて

小林 晶

会員の皆様、明けましておめでとうございます。美しい新年をお迎えのことと推察しております。

1987年に本学会が創設されて本年で26年目を迎えることとなります。また、1990年にAFJOが別に発足して領域が拡大し、同時に両国の交換研修制度による留学制度も開始されました。この間、両国会員のためまぬ努力によって発展の一途を辿っているのは喜ばしい限りです。ここに改めて関係各位に心から感謝の念を捧げる次第です。

昨年9月22日、東京で第15回SOFJOの学会が飯田哲会長、白土英明副会長主宰のもとで開催されました。参加者は230名とこれまでで最多数でありました。フランス側から5名の招待講演があり、一般演題からシンポジウムも生まれ、ポスター出題を含めて60題の多きを数えました。テーマは各領域に網羅されて、いずれも熱心な討論が続き盛り上がりしました。最後になだいなだ氏による「医がアートであることの発見—フランス医学との出会いから学んだこと」と題した特別講演で、掉尾を飾ることができました。氏は専門のアルコール依存症の経験を通じて、人生の機微に触れるエピソードを紹介して、「言葉は道具に過ぎないが、世界を拓く鍵といえる道具は小さくて大きい」と諧謔を交えて、立錐の余地のない満員の聴衆を魅了しました。

この学会を成功裡に終えることができたのは、船橋



整形外科病院、千葉大学整形外科の蔭のご援助の賜物だと感謝しております。

例年のように、学術発表の前に6名の交換留学生の帰国報告がなされました。時代を反映して伸び伸びと病院で研修をされ実りの多い収穫をえることができ、同時に私的にもエンジョイされた生活が伝わってきました。この制度もすっかり根付いて、昨年は志願者が遂に10名となり、我々面接側が嬉しい悲鳴を挙げました。残念ながら、これだけの予算の裏付けがSOFJOには無く、フランス側の受け入れの都合もあり、志願者のレベルは皆さん優劣を付け難いので、やむを得ず全員合格としました。但し、窮余の策として、一人一人の事情を勘案しながら奨学金を配分したり、フランス側に無理をお願いしたりして解決できました。今後、志願者の増大が考えられますので、送る側としては無理のない制度として運営したいと考えております。

昨年の冒頭にお約束しました仏日・日仏整形外科学用語集の編集が漸く終り、日本整形外科学会学術用語委員会にも諮問いたしました。同委員会からは、極めて詳細な意見を戴き感謝しております。これを踏まえて、さらに討議を行い、整合性を含めた最終案を纏める段階に達しました。会員の皆様には、ホームページを通じて、ご意見を戴くようにしておりますので、忌憚なくお寄せくださるようお願いしております。

今回は森崎名誉教授の用語集を基盤にして、新しい時代に相応しい新用語集になると考えております。詳細はまた改めてお知らせしますが、今後、仏日だけではなく、日仏への検索にも利用可能とし、フランス語の文献に接し易くなりました。これで多大な利便性を持つと自負し、大いに活用して戴くことを希望しております。勿論、全国の大学、病院などにも利用して戴くように送付する予定です。

今年の5月30日から6月1日には第12回AFJOが京都で、飯田寛和(関西医大)、田中千晶(京都市立病院)両会長により開催されます。既に学会事務局からは、予告と

演題募集の第3報が届いております。情報によれば、今回もフランス側から多数の参加があるようであり、多くの日本側の皆様も是非参加して戴き、美しい新緑の京都でお会いできることを楽しみにしております。

昨年11月開催されたSOFJOTには多数の会員の方々に参加されたようです。この模様を是非参加できなかった会員に知ってもらうために、INFOSの誌上を借りて報告したいと計画しております。SOFJOTはAFJOの会告を掲載していると同時に、一昨年は初めての招待国として、わが国を選んでくれました。SOFJOTはAFJOを後援事業の一つとして考慮してもらっていることを是非認識しておいてくださるようお願いいたします。このためにもSOFJOの存在を日本整形外科学会に認識を深めてもらうことと、緊密な連携を保って発展の基礎にしたいと念願しております。



例年報告して皆様にご心配をかけております学会の財政面の問題は、幸い会員の皆様方の浄財と、執行部の努力で何とか均衡を保っています。しかし、今後のINFOSの出版、留学生制度などを含めた事業の拡大発展のためには、どうしても今以上の安定が必要だと痛感しております。世の中の不景気に禍いされ、第三者への依存は多くは望めません。会費の納入はもちろん財政面の問題を、考えて戴くと幸いです。

なお、七川名誉会長、小野村名誉会員には、益々お元気で、しばしば学術集会、執行部の会議、委員会にご出席くださり、貴重なご意見をうかがっております。今後ともご自愛の上、アドバイスを賜りますようお願いする次第です。

今年の皆様のご健康と学会の発展を期待しつつ、新年の措辞にいたします。

## 第15回日仏整形外科学会開催記

# フランス整形外科のエッセンスを学ぶ

松戸市立病院整形外科 飯田 哲

平成24年9月22日に東京ドームホテルにて開催致しました第15回日仏整形外科学会に際しましては、多大なる御協力・御指導を賜り、誠にありがとうございました。

七川欽次名誉会長、小野村敏信名誉会員、小林晶会会長を始め、230名を超える多くの先生方にご参加をいただき、暖かい激励のお言葉をいただきました。

お陰様で、滞りなくすべてのプログラムを終了することができました。

特別講演：1題、ランチョンセミナー：2題、帰朝報告：6題、パネル：20題、一般演題：23題、ポスター：18題をご発表いただき、活発な質疑応答をしていただきました。

今回はフランスから5名のドクターにご参加いただき、パネルディスカッション、ランチョンセミナーなどでご講演をいただきました。フランスと日本の演者を交えた5つのInternational panel discussionでは、各演者のご発表後に一括討議をしていただきました。

パネル1「特発性大腿骨頭壊死症」では、IONに対する骨髄細胞移植の世界的リーダーであるHernigou先生の講演後、日本での骨髄細胞移植の成績をご発表い



●International panel discussion

ただきました。

パネル2「Dupuytren contracture」では、本邦にも導入予定のcollagenase注入療法の経験をMasmejean先生に紹介していただき、今後のcollagenase注入療法の位置付けが議論されました。小林晶先生から「孤高の外科医ギョーム・デュピュイトラン男爵(1777-1835)」と題する特別発言をしていただき、また、山内裕雄名誉教授に座長の労をお採りいただき、格調高いセッションとなりました。

パネル3「Bearing surface of THA」では、Hamadouche先生の講演後にCeramic on ceramic、Metal on metalおよびフランスでのdual bearing THAの成績が発表されました。その中でCharnley先生より連綿と続く22mm骨頭の有用性が論じられた事は印象的でした。

パネル4「Degenerative lumbar spine」ではBronsard先生を中心に3名の日本の演者を交えて隣接椎間障害について熱い議論がなされました。

パネル5「My basic planning of TKA」はHernigou先生とHamadouche先生を交えてprimary TKAにおける日仏での手術手技および機種選択の相違など実質的な議論がなされました。

帰朝報告は、フランスに留学した6名の先生にご発表いただきました。日本では見られない人工手関節置換術やreverse type人工肩関節置換術の実際が紹介され、またフランス発祥のTHA前方法における日仏の相違なども論議されました。同時にフランスの文化・風俗も紹介され、一人10分の持ち時間とは思えないほど盛り沢山の内容でした。

ランチョンセミナーでは、Tarik先生に、日本に導入予定のセメントレスシステムのコンセプトと長期成績をご講演いただき、稲葉裕先生には人工関節周囲感染の最新の知見についてご講演いただきました。

昼のポスターセッションでは、日仏整形外科学会恒

例のワインと共に和やかかつ活発な議論がなされ、午後のセッションへの英気を養っていただきました。

また、作家・精神科医のなだいなだ先生には「医がアートであることの見聞—フランス医学との出会いから—」をテーマに特別講演をお願い致しました。60分間のご講演中スライドを1枚も使われず、お話しだけで満員の聴衆を魅了されました。なだ先生がどのようにフランス人の奥様を口説いたのかという鋭い質問も飛び出しましたが、なだ先生のユーモアを交えてのご回答はさすがでした。

閉会式では、七川欽次名誉会長に学会の総括をしていただき、また次回AFJO会長の田中千晶先生より京都での開催を魅力的なslideでご紹介いただきました。

全員懇親会にも多数の方にご出席いただき、会を盛り上げていただきました。彦坂眞一郎氏と東井美佳さんのSax & Piano Duoをワインと共に皆様にお楽しみいただけましたら幸いです。

学会期日が東日本整形災害外科学会と日程が重なっておりましたが、多くの先生は学会を掛け持ちしてご出席いただき、また中には早朝の駅伝大会参加後に駆けつけてくれた先生方もいらっしゃったようで、本会



●特別講演をされるなだいなだ先生

を無事終えることができましたのも先生方の御指導・御鞭撻の賜物と改めて深謝致します。

学会翌日は、フランスの先生方と共に新橋演舞場で歌舞伎を観劇し、多少なりとも日本の文化をご紹介させていただきました。山内裕雄名誉教授、一青勝雄教授にはご夫妻でご参加いただき、エクスカージョンを盛り上げていただきました。

学会開催に際しましては、不慣れでご迷惑をおかけしたことも数多くあったかと存じますが、何卒ご容赦いただきたくお願い申し上げます。

今後も、日仏整形外科学会の発展に、微力ではございますが、尽力して参りたい所存でございますので、よろしくお願い申し上げます。



●新橋演舞場にて

《第1会場・オーロラ》

■ 帰朝報告 座長：金子和夫・大橋弘嗣

平成23年度日仏整形外科学会交換研修帰朝報告  
齊藤朝海（東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センター整形外科）

平成22年度日仏交換研修帰朝報告  
奥村法昭（近江八幡市立総合医療センター整形外科）

DAA さまざまな術者の手技の違い  
西脇 徹（静岡赤十字病院整形外科）

2011年日仏整形外科学会交換研修報告  
金城 健（南部医療センター・こども医療センター整形外科）

憧れのパリ そして フランス医療の現在  
塚本理一郎（湘南鎌倉人工関節センター）

リヨン・パリ帰朝報告  
久保田光昭（順天堂大学整形外科）

■ SOFJO International Panel Discussion 1: Osteonecrosis 座長：久保俊一・安永裕司

THE STRATEGY OF CELL THERAPY IN BONE HEALING DISORDERS; ESPECIALLY NON-TRAUMATIC OSTEONECROSIS  
Philippe Hernigou（University Paris XII; Hospital Henri Mondor; Creteil; France）

特発性大腿骨頭壊死症に対する骨髄単核球移植  
山崎琢磨（広島大学大学院医歯薬学総合研究科整形外科）

大腿骨頭壊死に対する濃縮自家骨髄血移植術の治療成績  
赤萩 博（筑波大学大学院整形）

■ SOFJO International Panel Discussion 2: Dupuytren's contracture 座長：山内裕雄・大橋弘嗣

Place of the use of clostridium histolyticum collagenase for Dupuytren's disease: preliminary results.  
E. Masmajeau（Hand Surgery Unit, Georges-Pompidou European Hospital (HEGP), Paris, France）

Dupuytren 拘縮の病態と治療-future and Renaissance  
阿部圭宏（佐倉整形外科・手外科センター）

当科におけるDupuytren 拘縮の手術方法の工夫と術後成績  
岩瀬嘉志（順天堂東京江東高齢者医療センター整形外科）

■ ランチョンセミナー1 座長：田中千晶

Long Term Success of Corail: What was the Secret ?  
T. A. S. Selmi（Lyon Croix-Rousse University Hospital, Orthopaedic Surgery Department）

■ SOFJO International Panel Discussion 3 : Bearing surface of THA 座長 飯田寛和・原田義忠

Bearing Surfaces in Total Hip Arthroplasty: The Good, the Bad and the Ugly  
Moussa Hamadouche（Orthopaedic Surgery, Hopital Cochin, APHP, Universite Paris 5, Paris, France）

Metal-on-metal人工股関節全置換術の骨頭径の違いによる金属イオン濃度についての比較検討  
老沼和弘（船橋整形外科病院）

Ceramic on ceramicとmodular neck stemの2つの特徴をもつANCA-FIT THA の中期成績  
馬場智規（順天堂大学医学部整形外科）

Dual Mobility Liner. The prevention of dislocation.  
本間康弘（順天堂大学整形外科学講座）

人工股関節全置換術における22mm 骨頭の使用  
田中千晶（京都市立病院整形外科）

■ SOFJO International Panel Discussion 4 : Degenerative Lumbar spine 座長：高橋和久・瀬本喜啓

THIRTY FIVE YEARS OF LUMBAR FUSIONS USING THE RULES OF ORTHOPEDIC SURGERY  
Jean-Jacques Bronsard（Vertebral Surgery Unit of Professor R. LOUIS in Marseille (France).）

腰椎変性すべり症に対する後側方固定術の長期成績と術式の低侵襲化  
安宅洋美（松戸整形外科病院・脊椎センター）

第4腰椎変性すべり症に対する1椎間除圧固定後の再手術の危険因子  
弓削 至（労働者健康福祉機構・総合せき損センター整形外科）

腰椎固定術における骨癒合促進に関する検討  
大鳥精司（千葉大学大学院医学研究院整形外科学）

■ 特別講演 座長：小林 晶

「医がアートであることの発見」・・・フランス医学との出会いから学んだこと・・・（若き日のフランス語との出会い）  
なだいなだ（作家、精神科医）

《第2会場・シンシア》

■ 一般演題1（肩・スポーツ・その他） 座長：佐粧孝久

無症候性腱板断裂は炎症を合併しない一骨シンチグラフィーによる無症候性断裂と症候性断裂との比較一  
小池洋一（仙台赤十字病院整形外科）

陳旧性アキレス腱断裂に対し人工靭帯を用いた再建術  
久崎真治（第一なるみ病院）

前・後上腕回旋動脈に関する解剖学的研究  
魚水麻里（済生会川口総合病院整形外科）

整形外科医は被災地にどう貢献出来るかー地方巡業する医者意見一  
仲田公彦（こすがクリニック）

■ 一般演題2（股関節・その他） 座長：中村順一

人工股関節手術における術中圧計測  
三橋 繁（習志野第一病院整形外科）

股関節周囲筋と骨盤底との解剖学的関連性の検討  
田巻達也（船橋整形外科）

ZIMMER VerSys Taper stem とMidcort stem の術後骨変化の比較  
野口森幸（仙台赤十字病院）

## 人工股関節置換術中のcementless stem 周囲大腿骨骨折について

丸山 正昭（長野厚生連篠ノ井総合病院整形外科）

## 進行期股関節症に対するキアリ骨盤骨切り術の成績

坂巻豊教（ふれあい鶴見ホスピタル整形外科）

## 一般演題3（股関節）

座長：老沼和弘

### 厚生労働省特発性大腿骨頭壊死症研究班病型分類の再現性の検証

中村順一（千葉大学大学院医学研究院整形外科学）

### 感染人工関節に対する術前評価方法

おおえ賢一（関西医科大学附属枚方病院整形外科）

### Can Bone Marrow Mesenchymal Stem Cells loaded in a femoral head allograft rescue an osteogenic capacity equivalent to that of an autograft?

本間康弘（順天堂大学整形外科学講座）

### 人工股関節置換術後の3次元歩行解析

牧田浩行（神奈川県立足柄上病院整形外科）

### Dual energy X-ray absorptiometry（DEXA 法）を用いた膝関節周囲骨密度と大腿骨近位骨密度の測定

阿部里見（旭川医科大学整形外科）

## ランチョンセミナー2

座長：一青勝雄

### 人工関節周囲感染に関する最近の話題と今後の展望

稲葉 裕（横浜市大）

## ポスターセッション（自由討論）

### 変形性股関節症における疼痛部位と関連痛

大前隆則（千葉大学大学院医学研究院整形外科）

### 変形性股関節症患者の視床におけるNアスパラギン酸濃度は低い—磁気共鳴スペクトロスコピー研究—

重村知徳（さんむ医療センター整形外科）

### 3次元術前計画ソフトウェアを用いたS-ROM ステムにおけるネック長、前後捻の角度に対するROM変化量の検討

高澤 誠（千葉大学大学院医学研究院整形外科学）

### ヘッド—ネック接合部に金属腐食を生じた人工股関節例におけるステムネックテーパー部の解析

吉川智朗（永井病院整形外科）

### 高齢者における骨脆弱性仙骨骨折のMRI診断

山本りさこ（厚生連吉田総合病院整形外科）

### 腰痛教室が慢性非特異的腰痛患者のQOLに及ぼす効果～健康関連QOLスコア（RDQ）に着目して～

大石敦史（船橋整形外科西船クリニック 理学診療部）

### 成長期腰椎分離症の下肢筋柔軟性に関する検討

石垣直輝（船橋整形外科病院）

### 大腿骨頭すべり症に対するin situ pinning後のすべりの進行

萩原茂生（千葉大学大学院医学研究院整形外科学）

### 前方進入法による一期的両側同時THAの手術成績

三浦陽子（船橋整形外科病院）

### 悪性骨腫瘍に対する術前持続動注化学療法を併用した縮小手術の治療成績

大野貴敏（岐阜大学医学部整形外科）

### 当院における鏡視下肩腱板修復術後の疼痛管理

小形松子（船橋整形外科病院看護部）

### Zweymüller型システム（Profemur Z）の固定様式の検討

神川康也（帝京大学ちば総合医療センター整形外科）

### 先天性股関節垂脱臼の治療

小泉 渉（成田赤十字病院）

### 人工股関節置換術に至った大腿骨頭壊死症患者における臼蓋形成不全の頻度

上田祐輔（船橋整形外科病院）

### TKAにおいて伸展GAPは屈曲GAPに影響するか？

河本泰成（松戸市立病院整形外科）

### 人工股関節再置換術後に発生したchronic expanding hematomaの1例

宮本周一（国保松戸市立病院整形外科）

### 大腿骨転子部骨折術後破綻例に対する人工股関節全置換術の短期成績

山本晋士（松戸整形外科病院）

### TKAにおける関節包縫合前後のバランス評価

李 泰鉉（千葉県千葉リハビリテーションセンター整形外科）

## 一般演題4（小児・外傷）

座長：青木 清

### リスクファクターを用いた松戸市の乳児先天性股関節脱臼検診

品田良之（松戸市立病院整形外科）

### ペルテス病治療後に生じる脚長不等についての検討

田村太資（大阪府立母子保健総合医療センター整形外科）

### PFNA による大腿骨転子部骨折治療では125度のインプラント使用が望ましい

安間基雄（山近記念総合病院）

### 不安定型骨盤輪骨折整復固定に対するLumbo-iliac spinal instrumentation

藤原正利（西神戸医療センター）

## 一般演題5（脊椎・腫瘍）

座長：山崎正志

### 当院における頸髄症に対する外側塊スクリュー併用椎弓形成術の小経験

鳥飼英久（千葉県済生会習志野病院 整形外科）

### すべりを合併した頸椎症性脊髄症（CSM）に対する後方除圧固定術の成績

百村 励（順天堂大学整形外科）

### 急性脊髄損傷に対する顆粒球コロニー刺激因子（G-CSF）を用いた神経保護療法：多施設前向き比較対照臨床試験

山崎正志（千葉大学大学院医学研究院整形外科学）

### Klippel-Feil 症候群に合併した小児環軸椎回旋位固定に対して後方固定術を行った一例

小坂理也（市立枚方市民病院整形外科）

### 類骨骨腫に対するCT ガイド下ラジオ波焼灼術による低侵襲手術

大野貴敏（岐阜大学医学部整形外科）

## SOFJO International Panel Discussion 5 : My basic planning of TKA

座長：長嶺隆二・箕田行秀

### RCT Multicenter Comparison of Primary TKA Using Patient Specific Versus Conventional Instrumentation

Moussa Hamadouche（Orthopaedic Surgery, Hospital Cochin, APHP, Universite Paris 5, Paris, France）

### Proper Bone Cuts In All Three Dimensions To Correct The Deformity in Primary TKA

Philippe Hernigou（University Paris East）

### 人工膝関節置換術における正確な伸展・屈曲ギャップ作成システム

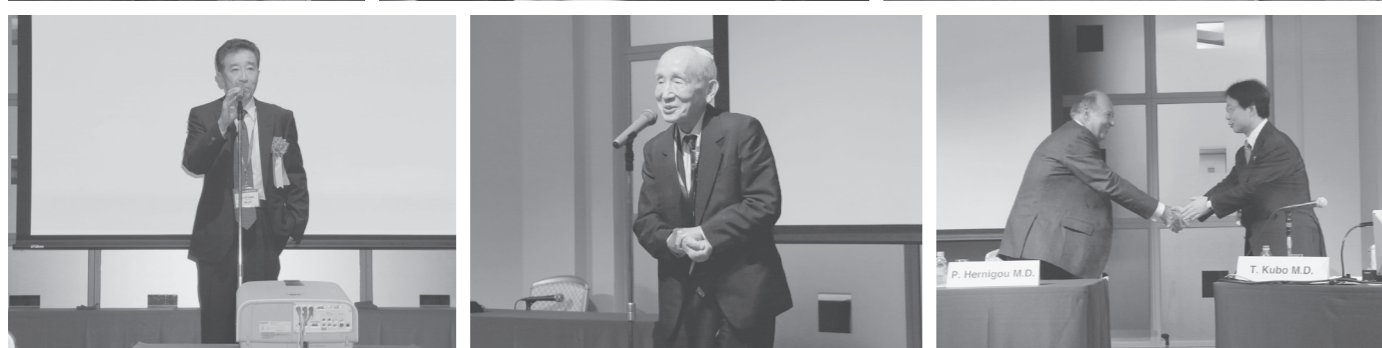
金山竜沢（船橋整形外科病院）

### TKA 術中および術後において、関節裂隙は屈曲90度と120度では異なる

長嶺隆二（杉岡記念病院整形外科）

### Primary TKA に対する治療戦略—TKA におけるポリエチレン摩耗の軽減—

箕田行秀（大阪市立大学大学院医学研究科整形外科学教室）



# フランスならではの…? SOFCOT参加記

2012年11月12～16日に行われた第87回SOFCOTに参加したので報告します。

通常どおり学会が運営されると思いきや、なんとパリ勤務の外科医を中心とした大規模なストライキと学会が重なり、当日はスケジュールが大幅に変更され、デモ行進が行われる午後の早い時間帯は全ての発表が中止、シンポジウムなどは午前中に繰り上げられ、デモ行進が終了し夕方遅くから学会が再開される始末。しかし例のごとくストライキが日常的な彼らにとっては、どこ吹く風で、ストライキのメッセージがプリントされたTシャツを来た医師が演者に質問を行っており、フランスならではの学会様子でした。

今年は2つのシンポジウムが開かれ、テーマは①

Fracture de la palette humérale du sujet âgé. ②Cause d'échec des Prothèses Totales de hancheでした。また、股関節高位脱臼のセッションがあり、本邦からの論文が数多く参照されていました。

日本人医師も例年のごとく活躍をしました。SOFJO書記長の大橋弘嗣先生が発表を行い「Précision de la navigation sans imagerie pour les arthroplasties totales de hanche pour dysplasie (concernant le positionnement de la cupule et l'allongement du membre)」, SOFJO幹事である順天堂大学金子和夫教授がSOFCOT名誉会員に選ばれ、初日の午後に授賞式が行われました。SOFCOT会長であるJean-Pierre COURPIED教授(AFJO役員)より、日本とフランスの整形外科交流に大きく貢献している事が伝えられ、メダルと賞状が授与されました(写真は授賞式の様子)。また、日本人でありながらパリ大学を卒業し整形外科研修をパリで行っている岸孝章(KISHI Takaakira)先生も口頭発表を行い、日本語・仏語を母国語として持つ彼の活躍は今後の日仏整形外科交流の大きな推進力になる事を感じさせてくれました。

最後に、2013年のSOFCOTは11月11日～15日に開催され、2つのシンポジウムが予定されております。

「①Conflit fémoro acétabulaire de l'enfant à l'adulte、②Traitement des fractures sus, inter condyliennes et uni condyliennes déplacées de l'extrémité inférieure du fémur」多数の日本人参加者を期待し、増々の日仏整形外科交流の発展を願います。



●参加された先生方と(右は金子教授夫妻)



●Courpied教授からSOFCOT名誉会員のメダルを授与される金子教授



●学会風景



●学会風景



●学会風景

## 日仏整形外科学会交換研修帰朝報告2012

茨城西南医療センター病院整形外科  
渡辺 新先生

2012年4月から3ヶ月間、リヨン・パリで膝関節外科を中心に研修させて頂きましたので、御報告させて頂きます。

4 - 5月； Lyon； Hôpital de la Croix Rouse, Centre Albert Trillat

日仏整形外科学会の交換研修として多くの先生方が訪問されていますが、リヨンではProf.Philippe Neyret(写真1)の下で研修させて頂きました。この病院はProf.A.TrillatからProf.H.Dejour、そして現在のProf.Ph.Neyretへと続く伝統ある病院です。Neyret教授の他に、女医のServien教授、Chirurgien4人、Interne4人で構成され、各国からのfellowは自分以外に

スペイン、コソボ、アルメニア、トルコ、ブラジルから来ていました。(ちなみに2015年にはLyonでISAKOSが開催される予定との事です。)

自分の1週間のスケジュールは、月曜日が教授の外来及び夕方から術前カンファ・病棟回診。火曜日から金曜日は朝8時から手術の見学・手洗いでした。手術室は2~3つを使用し、1日約7~10件行っていました。麻酔は概ね脊椎麻酔でやっており、麻酔室で事前に麻酔をかけた後に手術室に運ばれてくるので、時間のロスが少ない印象がありました。手術の内容は、ACL、TKA、PCL、MPFL、HTO、UKA、半月板と膝の多岐に渡っていましたが、肩の手術やTHA、外傷などもやっていました。大腿部を手術台の側面に取り付けた体側支持器により保持し、同じく足部も支持器で保持し、



●写真1 Neyret教授執刀のTKAに手洗いで参加



●写真2

膝関節90度の肢位にてACLやTKAなどの膝手術を行っていました(写真2)。タニケットは全例で使用していました。

ACLはBTBを用いての再建で、大腿骨側はアウトサイドインで骨孔を作成していました。グラフトを大腿骨側からretro-gradeに誘導し、大腿骨側はスクリューを使用せずプレスフィットにて固定していたのが印象的でした。revision症例には、薄筋腱を使用して外側の関節外再建を追加していました。また半月板損傷に対しては可能な限りFast-fixを用い縫合していました。

TKAに関しては、まず皮膚切開後に全例創縁にタオルを縫着しているのが特徴的でした。アプローチはmedial parapatellar approachで、膝蓋骨は反転しfat padは全切除していました。PS、mobileタイプのフランス製のインプラントを使用し、セメント固定。膝蓋骨は全例置換していました。ちなみに術前の作図は全く行っていませんでした(HTOでもUKAでもTHAでも行っていませんでした)。

共通して言えるのは、皆手術が上手で手際が良いです。ACLは早いと40分足らずで、TKAも1時間で終わります。フランスでは整形外科は基本的に手術をする科であり、我々が外来で行っている膝や腰等の保存治療(注射や投薬等)はやらないようです。また麻酔科医が術後管理を行うため、整形外科は手術に専念することができ、手術も早く上達していきます。うらやましい限りです。清潔操作には非常に気を配っており、手袋は必ず2重とし、術中に頻繁に交換していました。またnon-touch techniqueを徹底してやっていました。しかしながら(何故か?)洗浄はほとんど行っていません



●写真3 Neyret教授の御家族と

んでした。

Neyret教授には御自宅に2回招待して頂き、とても良くして頂きました(写真3)(1回目は御家族とのランチに誘われ非常に緊張しました。2回目は他のfellowと一緒に夕食に招待され、かなり酒を飲んで完全に記憶が飛んでしまい、さらに病院からアパートへ帰る途中に転倒したようで額を擦りむきました…異国の地で死ななくて良かったです…。)各国からのfellowも遠く日本から来たという事で親切にしてくれ、特にスペインのJuanとアルメニアのArsenには仲良くしてもらいました(写真4,5)。

4月下旬からは同じ日仏の交換研修医として成尾先生がリヨンに来られ、御家族と一緒に食事に行き、ま

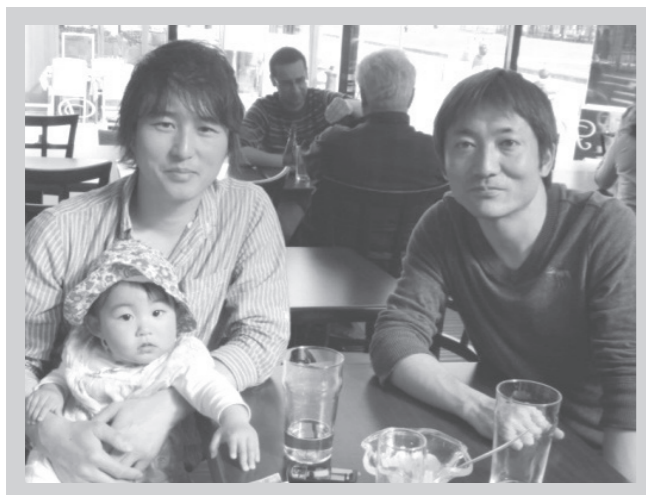


●写真4 右端がDr.Juan

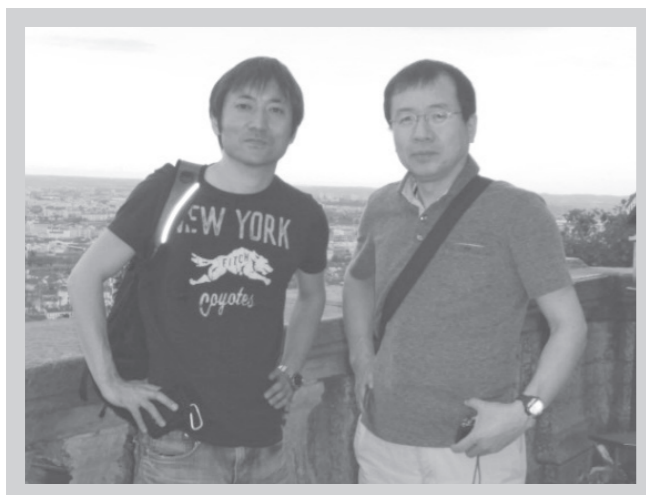


●写真5 右端がDr.Arsen





●写真6 成尾先生と



●写真7 星先生とフルビエールの丘にて

手術をやっていました。手術室は3つで一日10~12件の手術を行っていました。フランス整形外科の手術数ランキングでも上位にランクインされているようで、雑誌のランキング表が手術控室に貼ってありました。Arago Cliniqueでもメインは膝の手術を見学・手洗いし、たまにTHAに参加していました。リヨンとは違いこじんまりしていましたが、フレンドリーで手術室の雰囲気は良かったです。Dr.Bellierは、ACLはST+Gを用い、1重束で再建していました(以前は2重束で再建していたようですが臨床成績に大きな差が無い事と、フランスでも医療費が厳しくなっており、最近では1重束で再建しているとのことでした)。TKAはストライカー社のScorpioをメインで使用し、PS・セメント固定・膝蓋骨は全例置換でした。

またパリ滞在中に大腿骨頭壊死症に対する骨髓血移植で有名なProf.Philippe HernigouのHopital Henri Mendorにも見学に行ってきました。Prof.Hernigouの所には順天堂大学の本間康弘先生が留学されており、本間先生に手術室や骨髓血を遠心・分離するための施設(CPC)などを案内してもらいました。牽引ベッドは使用せず(筑波大学では牽引ベッドを使用しているのですが)、仰臥位のままで両側腸骨より骨髓血を採取し(写真9)、CPCにて厳格な滅菌操作の上、遠心分離された後に再度病院に運ばれ、手術室で壊死部に注入していました。自分が見学した症例は、股関節だけでなく膝関節にも注入していました。



●写真8 Dr. Bellier

## 余談

実生活についてですが、リヨンでは病院から徒歩約15分のアパートマンを秘書さんから紹介してもらい通っていました。家賃は月800€で、電気・ガス・水道・インターネット込みでした。基本的に食事はスーパーで購入したものを簡単に調理し、たまにfellowとレストランに行ったりしました。ワインが安いのですが、ビールも激安で自分はビールばかり飲んでいました。週末にはサッカー観戦やオペラ鑑賞を楽しんだり、またハンドボール(ロンドンオリンピックの女子最終予選; 残念ながら日本は負けてしまいました…)を京都府立医大の齋藤先生と見に行ったりしました(写真10)。リヨン滞在中にフランス大統領選があり、現職のサルコジ大統領が負け、オランド氏が新大統領となったのも思い出深いです。

パリでは日本からインターネットで探していったアパートマン(パリ12区)に滞在し、そこからメトロで病院まで行っていました。パリのメトロはスリが多いと聞いていたので、ビビっていましたが、特に危険な目に会う事もなく無事過ごせました。パリではアパートマンの近くに安くて美味しいベトナム料理店を発見し、週2~3回はそこで夕食を食べていました。休みの日には、ルーブル美術館やオルセー美術館に行ったり、パリ近郊のロワールの古城や、ランスの大聖堂を訪れたりしました。

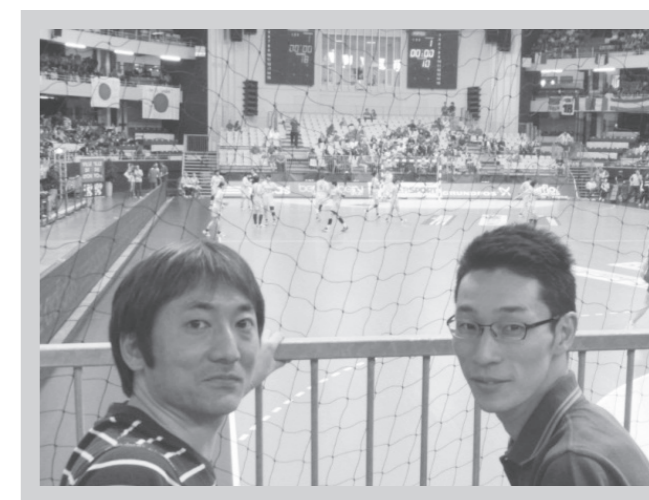


●写真9 両側の腸骨より骨髓血の採取

## 最後に

やはり言葉(フランス語)の壁は高く、自分の勉強不足を痛感しました。また単身での渡仏であったため寂しい思いもしましたが、各国からのfellowや、同時期に研修していた日本からの成尾先生、齋藤先生、本間先生のお陰で乗り切る事が出来ました。3カ月と言う短い期間ではありましたが、非常に良い経験をさせて頂きました。

最後に、この留学の機会を与え、Neyret教授を御紹介して頂いた会長の小林晶先生、日仏整形外科学会の役員の方、日仏整形外科学会を紹介して頂き、交換留学の推薦をして頂いた小松整形外科の星忠行先生、昨年Lyonに留学され、いろいろと情報を教えてくださった順天堂大学の久保田光昭先生、不在の間大変御迷惑をお掛け致しました筑波大学のスタッフの先生方・医局の先生方に深く感謝致します。



●写真10 齋藤先生とハンドボール観戦

た御自宅で夕食を御馳走になり、非常に有難かったです(写真6)。

さらに5月中旬には1992年に日仏整形外科の交換研修医であった小松整形外科の星先生がリヨンを訪れてくださり、その週末には一緒にニース・モナコまで足を延ばしたのも良い思い出です(写真7)。

## 6月；Paris；Arago Clinique

6月からはパリ14区にあるArago CliniqueでDr.Guy Bellier(写真8)の下で研修をしました。Arago Cliniqueは整形外科専門のプライベートクリニックで、8名のドクターが登録し、皆それぞれお付きのナース達と各々

## フランス留学帰国報告

仙台赤十字病院整形外科  
小池 洋一 先生

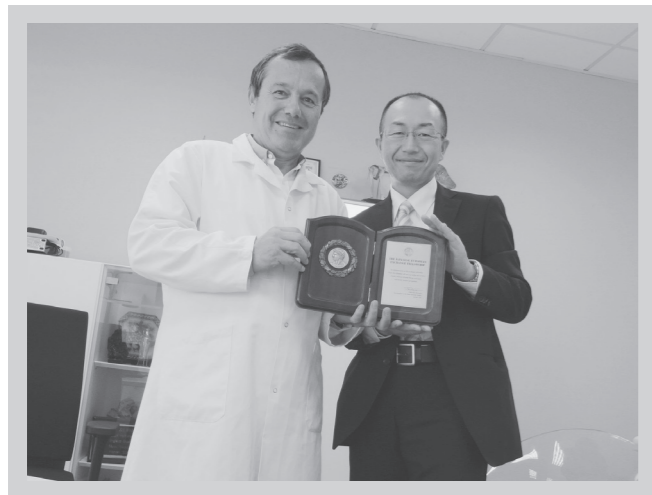
平成24年度日仏整形外科学会の交換研修に志願し、5月より1か月間、リヨンとニースで研修を行ってまいりましたので報告いたします。

### はじめに

はじめに、私が交換研修を志願した動機をお話いたします。

フランスと聞いて浮かんでくるイメージは多彩ですが、私がフランスに関心を持つきっかけとなったのはフランス語でした。あまり言われることがありませんが、フランス語には非常に特異かつ魅力的な2つの特徴があります：1) フランス語の起源はラテン語にさ

かのぼりますので、フランス語を学ぶことで、ラテン語の世界を垣間見ることができます。ラテン語は現在の医学・科学用語の語源となっていますので、フランス語を学ぶことから、医学用語の語源を知ることができます。2) フランス語の多くが、英語の中に外来語として取り込まれています。フランス語を学ぶことで、英語の語源や多彩な同義語を理解したり、英語スペルと発音との複雑な関係を理解することができます。というわけで、3年ほど前から、NHKのラジオ講座を聴いたり週1回のフランス語教室に通ったり、フランス語を学習しておりました。ただ、机上のフランス語学習では物足りず、徐々にコミュニケーション手段としてフランス語をもっと学びたい、そのために留学した



●写真1 反復性肩関節脱臼の手術(Latarjet法)や人工肩関節全置換術で有名なりヨンのGilles Walch先生



●写真2 名医は器用な手のみならず器用な足も持っている！ Gilles Walch先生は膝で上腕の位置をコントロールし人工肩関節置換術をこなします

いと思うようになりました。整形外科医がフランスに留学するには、、、日仏整形外科学会に志願するのが一番！と考え、交換留学に志願した次第です。

私の専門分野である肩関節外科では、リヨンのGilles Walch先生(写真1)とニースのPascal Boileau先生(写真4, 5)が先進的な臨床家として世界的に有名です。日仏整形外科学会の藤原憲太先生から2先生方に連絡をとっていただき、1か月の間、フランスで研修をさせていただけることになりました。

### リヨンでの研修

Walch先生の施設(Hopital Privé J Mermoz)では、反復性肩関節脱臼に対する関節形成術(Latarjet法)を見学させていただきました。烏口突起を関節窩前縁に固定するまでの一つ一つの手順を、同施設のNeyton先生から丁寧に教えていただきました。関節窩前面を安全に広く展開する方法、烏口突起を安定して固定する方法など、今までうまくできなかったポイントがよく理解できました。またWalch先生の人工肩関節全置換術にも入らせて頂き、見えづらい関節窩を十分展開するポイントを学ぶことができました(写真2)。印象的だったのは、Walch先生が個々の手術症例について私たちと討議することを大事にしていることでした。討議では、自らの症例データに基づき治療方針について持論を主張しますが、一方では常に他者の意見からアイデ



●写真3 LyonのNeyton先生(左)、東名厚木病院の成尾宗浩先生(中)、はちや整形外科の村松孝一先生(右)。親切な先生方のおかげで毎日充実した研修が送れました。

アをすくって、問題解決に役立てたいとする姿勢がはっきり分かりました。そのほか、関節鏡手術としては、Godeneche先生の華麗な腱板修復術を多数見学させて頂きました。Godeneche先生は、手術する肩が右でも左でも、一貫して左手にスコープを持ち、右手でフックやシェーバーを操作できるよう、鏡視・作業ポータルを作成して腱板を縫合しておりました。私(右利き)は今まで、左手(非利き手)でも右手と同じように手術器具が使えるように上達すべきと教育され、それが上手な関節鏡手術の条件と信じておりましたので、今までの自分の固定観念が180度ひっくり返る程の衝撃を受けました。

数えてみると、2週間の滞在の間に腱板修復術23例、Latarjet法7例、人工肩関節全置換術2例、その他5例を見学することができました。期間中、はちや整形外科の村松孝一先生、東名厚木病院の成尾宗浩先生と一緒に研修できたことが、大変心強く感じました(写真3)。

### ニースでの研修

ニースでは、Boileau先生が主催するNice shoulder courseに参加いたしました。2年ごとに催され、ヨーロッパ・北米の著名な肩関節外科医が講演を行う3日間のコースです。今年は27カ国から約800人が参加したとのことでした。朝の7時半からはじまり、夜の6時半まで講演や討議、ライブ手術などが行われました。世界のトップレベルの肩関節外科医達が何を問題とし



●写真4 Nice Shoulder Courseで開会のあいさつをするPascal Boileau先生

# 私達の フランス 研修

## 3

### 日仏整形外科学会交換研修帰朝報告

公立置賜総合病院整形外科  
長谷川 浩士 先生

解決しようとしているのかを知ることができ、非常に有意義な3日間でした。当日配布されたコーステキスト(shoulder concepts 2012)は内容が密で充実しており、大変驚かされました。これだけの内容を準備するには相当の時間・労力・情熱が必要でしょうし、何年にもわたってそれを続けてきたBoileau先生は本当に偉大などと、ただ恐れ入るばかりでした。

Shoulder courseの後、2週間ニースに滞在し、Boileau先生の手術を見学させていただきました。写真5は、その偉大なBoileau先生の手術の光景ですが、透視中にプロテクターも付けず、ナースの背後にかくれ被爆をさけながら(そして不必要に接触しながら!)楽しそうに手術をしていました。クリニックではreverse shoulderの術後患者さんの診察を拝見しました。reverse shoulderは、日本ではまだ承認されていないインプラントです。腱板広範囲断裂に対しreverse shoulderで関節置換を行うことで、術前不可能だった肩関節の屈曲拳上が可能となる様子は、非常に印象的でした。日本で私が診察している中にも、たくさんの腱板広範囲断裂の患者さんがいます。近い将来reverse shoulderが日本に導入され、腱板広範囲断裂の患者さんのADL向上に役立つことは、想像に難くありません。

ニースでは、腱板修復術9例、鏡視下Bankart-Bristow1例、鏡視下Bankart 1例、人工肩関節全置換術2例、reverse-shoulder4例、上腕骨近位端骨折1例、その他2例を見学することができました。



●写真5 手術室でNsと楽しそうに!コミュニケーションするPascal Boileau先生

#### 最後に

約1か月間、日本での臨床を離れフランスで肩関節外科の研修を行うことができました。このような貴重な機会を与えてくださった日仏整形外科学会の役員の方々に厚くお礼を申し上げます。この交換研修の更なる発展を願い、学会の一員として協力させて頂ければと存じます。また、渡仏を快諾してくださった東北大学整形外科の井樋栄二教授、仙台日赤病院の桃野哲院長先生、整形外科部長の北純先生、医局の先生方、日赤病院のスタッフの皆様にも感謝を申し上げます。フランスにいる間は、学んだことを日本でどう生かそう、皆にどう伝えていこう、と常に考えておりました。今回えられた貴重な経験を、日本の臨床に還元していく所存ですので、今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。

この度、平成24年度日仏整形外科学会交換研修医として3ヵ月間フランス研修をさせていただきました。ここにその研修報告をさせていただきます。

#### Strasbourg : Department of Spine Surgery, University Hospital of Strasbourg

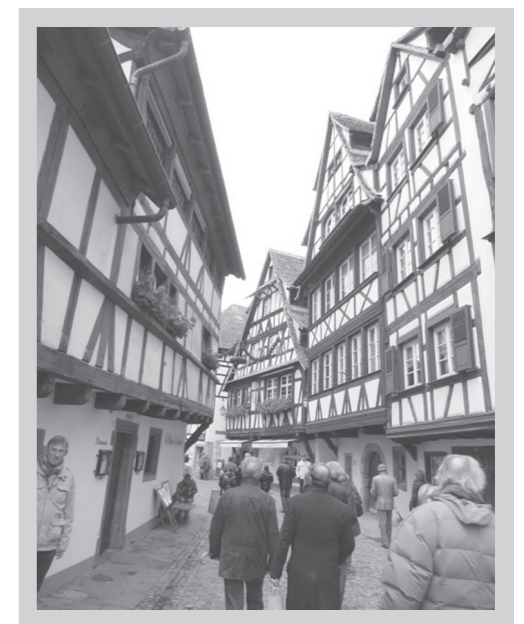
日本でも涼しくなり秋の訪れを感じ始めた10月上旬に最初の地Strasbourgに降り立ちました。Strasbourgはフランス北東部のAlsace地方の中心都市で、ParisからはTGVで2時間20分で結ばれています。街はドイツ

との国境近くにあり、過去にはドイツ領になったことがあるため食べ物や飲み物にドイツ文化の影響を感じました。ノートルダム大聖堂を中心としたGrand Îleグラン・ディールという古い建物の街並みや、Petite Franceという16~17世紀のアルザス特有の木骨組みの美しい家々が残る街並みなどは、まるで童話のワンシーンから抜き出したようでもとても綺麗な街でした。そういった街の中を近代的なTramが走り、新旧が入り混じってとても不思議な感じでした。

StrasbourgではHôpitaux Universitaires de StrasbourgのService de Chirurgie du Rachisの主任教授であるProf.



●写真1 Steib教授と



●写真2 Petite France (Strasbourg)

Jean-Paul Steib(以下、Steib教授)のもとで1ヵ月間研修させていただきました。この病院はストラスブール大学病院の整形外科の中でも脊椎外科だけを行っている脊椎センターのような所で、関節外科や手の外科は大学病院から離れた別の病院で行われているようです。ここではAlsace地方の各地から紹介されてくる慢性脊椎疾患や亜急性の脊椎外傷の手術を行っていました。緊急手術を要する脊椎外傷は大学病院の同じ敷地にあるNouvel Hopital Civilの救急センター(ヘリポートも完備)に搬送されるため、そちらに向いて行って手術をしていました。教授を含めたStaff Dr.は3人、Chef de Cliniqueは2人、Interneは5人おり、2つの手術室で毎日手術をしていました。朝は手術室に7時入室で、夕方まで手術三昧の日々でした。

Steib教授は脊椎側弯症の手術において、in situ contouring techniqueを最初に報告された先生です。最近日本でも認知されてきておりますが、後方矯正固定の際にmonoaxial椎弓根スクリューやフックを刺入・設置後に、まず側弯のカーブに沿ってチタン製ロッドを1本設置します。そのロッドを術野の中でベンダーを用いて徒手的に曲げながら側弯を矯正していく手術法です。矯正の手技にはいろいろコツがあるようですが、術後の矯正率は見事でした。チタン製ロッドなので長期的なロッド折損などが心配されましたが、Steib教授によると「無理のないアライメントに矯正することと、しっかりと骨移植をして骨癒合せればロッドが折損することはない」との考えでした。

側弯症のlong fusionなどは週1~2件ですが、あとは腰椎の後方除圧固定術や前方椎体間固定術・人工椎間板置換術、頸椎の椎弓形成術や前方固定術・人工椎間板置換術、脊椎骨折に対する後側方固定術や椎体形成術を見学しました。Steib教授は脊椎手術においてアライメント矯正・保持を重要と考えており、そのポイントは ①椎間関節を十分に切除してアライメント矯正しやすくすること ②十分な骨移植母床の作成をすること ③十分な自家骨移植を行うこと でした。そのため、日本で数多く行っていた開窓術などの除圧のみという手術はほとんどありませんでした。脊椎骨折に対して保存治療はあまり行っていないようで、一般成人には経皮的に椎弓根スクリューを刺入する低侵襲のシステムを用い、骨粗鬆症のある患者では経皮的に椎弓根スクリューを刺入後にスクリューの内腔を通じてスクリュー先端から椎体内にセメントを充填できるシステムや、セメントによる椎体形成術を行っていました。胸腰椎後方固定術後や椎体形成術後の偽関節症例には前方椎体間固定を行っていました。また下位腰椎に対する前方固定術や人工椎間板置換術も見学しました。特にStrasbourgでの研修中に人工椎間板のlearning courseにも参加させてもらい、そのコンセプトを知りました。

またこの病院では、術後も慢性的に疼痛が残っているような治療に難渋する症例に対して神経内科とペインクリニック科の医師と一緒に患者を交えた合同カンファレンスを行いその治療方針について相談しており、その様子も見学させていただきました。



●写真3 SOFCOT : Hernigou教授、日本より渡仏された先生方と



●写真4 Jérôme Allain教授と

## Paris : Hôpital Henri Mondor, University Paris East

11月からパリに移動しました。パリではHôpital Henri MondorにおいてProf. Philippe Hernigou(以下Hernigou教授)のもとで研修させていただきました。この病院はパリ市近郊にあり、私の住んでいた4区から地下鉄で30分くらいのところにあります。フランスにおいて整形外科は医学生から非常に人気のある科である反面、定員には限りがあり、かつ卒業後の研修病院は医学生時代の成績順に希望選択で決定されるとのことで、整形外科の倍率は非常に高いのだそうです。特にこの病院の整形外科も研修病院として非常に人気が高らしく、Interne達は熱心に仕事していました。この病院は救急センターが併設された総合病院であり、整形外科では脊椎、四肢関節、外傷と幅広く手術が行われていました。特に外傷患者はとて多く、毎日毎晩のように外傷の手術が行われていました(フランスでは交通事故がまだまだ多いのだそうです)。外傷の治療方針では、足関節骨折は術後の皮膚トラブルや感染などのリスクを考えてその多くがギプスでの保存治療を選択されていました。骨盤骨折は感染の問題や将来THAを行う場合のことを考え、こちらも基本的には保存治療が行われていました。高齢者の大腿骨頸部内側骨折は脱臼を避けるためにConstrain type THAが行われていました。

Hernigou教授は大腿骨頭壊死や骨折後の偽関節などに対する濃縮骨髓液移植治療を開発、研究されているこの分野の第一人者です。平成24年9月に開催された第15回日仏整形外科学会にもお越しいただいておりますが、非常に親日家の先生です。濃縮骨髓液移植治療はフランス全土の中でもこの病院だけで行うことが許可されているため、患者さんはあちこちから紹介されてくるのだそうです。

脊椎疾患に対する治療に関して、もう一人の教授であるProf. Jérôme Allainはフランス国内でも有数の下位腰椎に対し積極的に前方手術を行っている先生であるため、腰椎手術の7~8割は前方椎体間固定術もしくは人工椎間板置換術でした。日本では下位腰椎の前方進入手術は減多に経験できるものではありませんでしたので、非常に興味深い経験でした。下位腰椎への前方

進入は、展開に際して腹膜近傍の操作を要すること、とても深い術野の中で大血管近傍の操作、特に動脈の同定と結紮を行う必要があること、など難易度の高いポイントがいくつかあります。フランスの整形外科では研修期間中に腹部・一般外科を必ず回ることになっているらしく、そういった意味で腹膜近傍の手技には慣れているのかもしれませんが、椎体・椎間板前方の脂肪組織の中から血管を見つけだし結紮している様子は、見た目以上の難易度を感じました。下位腰椎人工椎間板置換術の手術適応については、①腰痛があり ②画像上、椎間板変性の所見があり ③椎間関節が変性していないこと ④50歳以下 とのことでした。この手術適応をそのまま日本に当てはめることはできませんが、腰痛に対する手術治療の考え方の違いを実感しました。

また、11月にはSOFCOTにも参加してきました。日整会に比べて採択演題数も少ない学会ですが、興味深い話もいくつかありました。フランスでは日常臨床でもhrBMP-2が使用されており、そういったGrowth factorについてのセッションもありました。また日本からお越しになった順天堂大学金子教授や京都市立病院田中先生、大阪府済生会中津病院大橋先生、松戸市立病院飯田先生といった先生方との会食にも同席させていただきました。またパリでの研修に際しては順天堂大学から留学されていた本間康弘先生に多方面に渡ってサポートいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

フランスで3ヶ月間生活し、フランスという国(国民性やフランスでの常識など)、フランスの医療・整形外科・医学教育・診療のシステムなどを知り、日本との相違点を数多く知りました。フランス人について世の中にはいろいろな意見があると思いますが、私が出会ったフランス人は皆とても温かい人達でした。こういった事はこちらで実際に過ごしてみないと実感することや知ることができなかったことであり、自分達の文化や自分達がやってきたことの良さと課題を再認識することができました。

フランスでは、本当に貴重な経験をさせていただいていることを感じながら日々生活していました。この経験はこれからの自らの診療に大いなる糧になることは間違いないと確信しています。今回、この研修の機

# 私達の フランス 研修

## 4

会を与えて頂きました小林晶会長をはじめとした日仏整形外科学会の先生方、特に私の研修に際し研修先へ橋渡しいただいた弓削至先生、Henri Mondor病院をご推薦いただきました順天堂大学金子和夫教授、また私の研修期間中に診療をサポートいただいた公立置賜総合病院の林雅弘副院長および整形外科の先生方、山形大学整形外科の高木理彰教授および医局の先生方への感謝の念に堪えません。この紙面をお借りして謹んで御礼申し上げますとともに、以上で研修報告とさせていただきます。

## 2012年度日仏整形外科学会交換研修に参加して

京都府立医大大学院運動器機能再生外科学(整形外科)  
齊藤正純先生

### はじめに

2012年5月下旬から8月上旬の約3ヵ月間、リヨンとパリで研修させていただきましたので報告いたします。

日仏整形外科学会の本研修制度は、本学から久保俊一教授、上島圭一郎先生が参加されたこともあって、数年前から知っておりました。これらの先生方から話を聞いたり、フランスでは昔から独創的なアイデアが生み出されていることを学ぶうちに、一度フランスの整形外科医療を見聞したいという気持ちが高まり、本研修に応募させていただきました。

2012年5月には京都府立医科大学が日本整形外科学会総会を主催したこともあって、渡仏が変則的な日程となり、また夏のバカンスのシーズンにかかることか

ら役員の先生方にはご心配を頂きました。しかし、充実した研修ができましたし、フランスの夏を十分に味わうことができたと考えております。

### Lyon Clinique Emilie de Vialar

日本整形外科学会総会が5月17日から20日まで京都で開催されましたが、その余韻も覚めやらぬまま5月22日に日本を出発しました。疲れもありましたが、これから始まる研修に対する期待の方が大きく、元気にフランスに到着しました。早朝に自宅を出発してパリに向かい、そのままシャルルドゴール空港からリヨンへ向かうTGVに乗りついで、リヨンへ到着したのは深夜となりました。



●Jaques Caton先生の診察室で



●Michel Bonnin先生とともに

早速翌日から日仏整形外科学会のフランス側のPresidentを務めておられるClinique Emilie de VialarのJacques Caton先生を訪問致しました。私が訪問した初日は手術日ではなかったためか、外来を済ませた後ビストロに昼食に連れて行ってくださり、地元の料理をごちそうになりました。「リオンはcapital of gastronomieだから食事楽しんでいくといい」と誇らしげにおっしゃっていました。

翌日は手術室に連れて行ってもらい、早速人工股関節全置換術(THA)に参加させていただきました。Caton先生と言えば長年のCharnly人工股関節の経験を持っておられるので、low friction arthroplastyの原法を使い続けておられるのかと思いきや、若年者にはセメントレスカップ、高齢者には脱臼予防のためにdual mobilityカップを使用されていました。しかし、ステムは一貫してセメントステムを使用されていました。手術の際には手洗いをし隣から見せてもらうことができましたが、皮切はストックネットの上から行い、筋膜を切開した時点で創縁にガーゼを縫いつけ、皮膚が術野に露出しないよう徹底しておられました。また、多くの先生方が見てこられたnon touch techniqueを徹底して手術が進んでいきました。皮切は大きく、オーソドックスな後方アプローチですが、しっかりと展開して手術を行うことが重要とおっしゃっていました。また、リーミングの前に寛骨臼底の骨棘をしっかり落として、必ず原臼蓋を露出することを徹底されていました。

この病院で印象的であったのは、手伝いに来た医学生を助手として手術を行っていたことです。学生はシーツかけや術野の消毒から器械の片付けまで行い、当然術中の脚持ち、糸結びもスムーズに行きます。いつも同じスタッフで同じように手術を行うため、手術時間は短く、手術の入れ替えもスムーズで、昼過ぎまでに45件の手術が終了することもざらでした。

Caton先生には自宅にも招いていただき、奥様と一緒に食事をさせていただきました。ご自宅はリオン郊外の広い庭のある大邸宅でした。フランスでは古いものをinnovationしながら住んでいくことに価値があるのだとおっしゃっていました。奥様も親家で英語が堪能であったため、楽しい時間を過ごすことができました。

リオンは世界遺産にも登録されている歴史ある美しい街です。一番日の長い時期に訪問したこともあり、夕方

や休日には街を散策することができました。幸い私が到着した時にはすでに高萩医療センターの渡辺新先生、東名厚木病院の成尾宗浩先生がリオンに留学されていました。先生方に街を案内してもらったり、一緒に食事をしていただき、大変勇気づけられました。こういった日本の整形外科医同士の交流が得られたのも日仏整形外科学会の研修に参加した成果と考えております。

また、リオン滞在中には本年の日本整形外科学会学術総会に招待講演で来日されていたMichel Bonnin先生に連絡を取ることができ、Centre Orthopedique Santyにも見学に行かせていただきました。Bonnin先生は下肢の人工関節を専門とされており、年間にTHA約250件、TKA約350件、TAA約30件と600件近くの人工関節を行っておられるそうでした。私が見学に行った日は2部屋を使ってTHA5件、revision THA1件、TKA2件のなんと合計8件の人工関節が行われました。週2回の手術日にはいつも7~8件の手術をしているとおっしゃっていました。それでも朝7時半に開始し、手術室を出たのは夕方の5時半ごろでした。さらに、いつも手術が終わるとプールで泳ぐか、ジョギングをして汗を流すそうでした。THA、TKAともに速いだけではなく、理論的で美しい手術をされるので大変勉強になりました。また、Bonnin先生は教科書を執筆したり、企業とのコラボレーションで海外を飛び回っておられ、そのvitalityも見習いたいと思いました。

## ■ Hospital Cochin

6月18日から7月13日までの4週間、パリ第5大学付属病院のHopital Cochinで研修させていただきました。本研修でも多くの先生方が研修されており、言わずと知れたTHAの聖地とも言える病院です。Hopital Cochinの整形外科はService AとBに分かれていますが、私はJean Pierre Courpied教授がChef de serviceを務めておられるService Aで研修させていただきました。宿舎として、これも多くの先生方が利用してこられた整形外科病棟(Ollier棟)最上階のレジデントルームを貸していただき、1カ月弱を過ごしました。日当たりが良すぎて夏は暑いというような体験談も過去のINFOSで読んでおりましたが、幸か不幸か私の滞在期間中は天気が悪く、涼しい日が多かったので、結構快適に過

ごすことができました。パリに来るまではレストランやカフェに一人で入るのを少しためらっていたのですが、この部屋には冷蔵庫や電子レンジがなかったため、朝は近くのパン屋にパンを買いに行き、夕食は病院の周辺のレストランやカフェで食事をしてビールやワインを一杯飲んで帰ってくるという生活にすぐ慣れることができました。

Hopital Cochinは毎年フランスの雑誌の人工股関節ランキングで1位を争っている病院で、年間700例から800例のTHAが行われているそうです。Ollier棟に整形外科専用の手術室があり、そこに人工関節や骨折の手術に必要な物品はすべてそろっているという非常にうらやましい環境でした。THAはすべて大転子切離アプローチ(ここではtrochanterotomyと呼ばれているようです)で行われます。primary、revisionや骨切り後の変形がある症例でもすべて迷わず大転子を切離して進入し、関節包をすべて切除するので寛骨臼の展開は非常に良く、勉強になりました。また、数本のwireを駆使して大転子を修復するのも慣れたもので、どの先生もピタッと大転子を元の位置に修復しておられました。Hopital CochinではTHA 再置換術の症例も多く見られたのが幸いでした。revisionでは寛骨臼側はallograftとKerboul十字プレートを使った再建術、大腿骨側はチップ状のallograftを充填してステムをセメント固定するというようにやり方が決まっています。そのため、

執刀医から周囲のスタッフまで迷いがなく、複雑なrevisionでも約3時間で終了していました。Courpied教授はまるで芋の皮でもむくかのようにallograftの大腿骨頭の軟骨をそぎ落とし、ボーンソーであつという間に骨欠損部に合うようにgraftを作成されており、まさに名人芸でした。allograftをふんだんに使える環境を羨ましく思うと同時に、日本では現在各病院の努力によりallograftが保存されていますが、使用しやすい環境になってほしいと思いました。

Courpied教授の外来も見学させていただきましたが、THA後30年以上経過した症例も数多く見ることができました。昔から一貫して変わらない手法で行われており、「成績が安定している方法を今さら変える必要はない」と自信を持っておっしゃっていました。一方でCourpied教授はtrialとして大腿骨頭にオキシニウムを使用したり、TKAではpatient specific guideを試用されていました。伝統の中に新しいものを取り入れようという気概を感じることができました。また、Hamadouche教授、Mathieu教授の手術にも何度も手洗いをし参加させて頂きました。Hopital CochinではTHA、TKAが中心でしたが、数多く手術に入れて頂き、大変勉強になりました。

Hopital Cochinは大学病院ですが、救急センターも持っており、外傷の患者がひっきりなしに運び込まれているようで、当直をしている研修医は非常に大変そ



●Hopital Cochin Jean Pierre Courpied教授

うでした。前日に来た外傷は翌日に手術するのが原則となっているらしく、毎朝のカンファレンスでは前日の当直医と学生が外傷の症例を発表し、当日の外傷担当のDr.が次々に手術の順番を決めていっていました。日本では大腿骨頸部骨折の患者が数日待たされることが多いと言うと、「信じられない」と言われてしまいました。外傷症例を早期に手術するシステムは、日本でも見習って行かなくてはならないと思いました。また、フランスの研修医は非常に忙しそうですが、短い期間に数多くの症例を経験しています。これも見習わなければならない部分があると思いました。

## ■ Hopital Henri Mondor

7月16日から8月3日の3週間、パリ郊外のCreteilにあるパリ第12大学付属病院のHopital Henri Mondorで研修させていただきました。SOFJOでも来日されたことのあるPhilippe Hernigou教授が主任教授を務めておられます。この病院はフランスのsickle cell diseaseの治療センターとして有名だそうです。それに伴う骨関節疾患の治療でも知られており、国外からも多数の患者が来院しているようでした。

この病院での特徴的な治療は、骨壊死症に対する骨髄細胞移植です。手術室で全身麻酔下に腸骨から骨髄液を採取し、それを研究室で濃縮して、再度骨壊死部に注入していました。手技としては簡便で、侵襲の少ない治療法であると思いました。テクニシャンの先生

に頼んで研究室までついて行かせてもらい、骨髄液を濃縮する手技も実際に見せて頂くことができました。適応や効果に関してはまだ検討すべき部分はあると思いますが、独創的な方法を20年近くも続けているということにHernigou教授の信念を感じる事ができました。

Hopital Henri MondorのTHAは後方アプローチで行われていました。ステムはセメント固定、カップは年齢によってセメントレスカップとセメントカップを使い分けているようでした。セメントレスカップの場合、摺動面はceramic on ceramicを使用していました。これもHernigou教授の長年の経験からの結論のようでした。この病院では大腿骨頸部骨折に対してもTHAを行うこともあってか、高齢者に対しては初回手術から好んでconstrained cupを使用していました。摺動面や脱臼に対する対策も病院によって方針が異なるということはフランスらしいなと思いました。また、この病院では変形性膝関節症に対する高位脛骨骨切り術や大腿骨遠位骨切り術も行われていました。それまで訪問した施設は人工関節が中心であったため、フランスでも骨切りを好んで行っている施設もあるのだなと新鮮に感じました。

さらに、Hopital Henri Mondorでは順天堂大学整形外科から留学されている本間康弘先生にお会いできたのも、大きな収穫でした。本間先生はHernigou教授の信頼も厚く、骨髄移植についての基礎研究や臨床研究を幅広く手掛けておられました。彼のフランス語は堪能で、スタッフにも人気があり、私が手術室や研究室で戸惑っているといつも助けてくださいました。私と年齢も近く、専門分野も同じ股関節、大腿骨頭壊死ということで、臨床、研究などについて時間を忘れて論議することができたのも良い経験でした。また、彼は当科の上島先生が日仏整形外科学会の交換研修生としてフランスを訪問中、宿舎に転がり込んでしばらく同居したことに大変恩義を感じておられ(INFOS 19号参照)、私に大変良くしてくれました。週末にはパリを案内してもらい、地元の人が勧めるような店を食べ歩いたり飲み歩いたりし、単身で渡仏した私は非常に嬉しかったです。彼の今後の健闘、研究の成功を祈るとともに、日本に帰ってもお互い切磋琢磨できることを願って帰路につきました。



●Philippe Hernigou教授夫妻と本間康弘先生との食事会

## ■ フランス生活

日本にいる時と違って週末は気楽に過ごすことができましたので、色々な所に出かけました。フランスは鉄道網が充実していますので、朝に駅に向かい、主に電車で各地に出かけるのが楽しい週末の過ごし方でした。パリの近場ではVersille宮殿、Fontainebleau城、遠出して南仏プロヴァンス、ロワールの古城巡り、シャルトルの大聖堂など世界遺産に登録されている街や施設を訪ねて回りました。それぞれ大変保存状態が良く、絶え間なく修復が行われており、大変感動しました。短期間に旅行するだけでは味わえない部分のフランスも味わうことができたと考えております。

また、夏のフランスは祭りやスポーツイベントが目白押しで、色々楽しむことができました。7月14日の革命記念日にはシャンゼリゼ通りのパレードを見に行きました(これをパリ祭と呼ぶのは日本だけで、現地では単にQuatorze Juilletというそうです)。残念ながら人ごみでパレードはよく見えませんでした。市街地を軍用機が低空飛行し、すごい迫力でした。また、翌週には自転車レースの最高峰、ツール・ド・フランスのゴールを見に行きました。数時間炎天下で待ち続け、こちらが干からびそうでしたが、いざレースが始まるとすさまじいスピードで自転車が駆け抜けていき、激しいデッドヒートに熱くなりました。さらに、女子サッカーなどでしこジャパンのロンドンオリンピック前



●ツール・ド・フランスのレース直前

の壮行試合がパリで行われ、見に行くことができました。結果は完敗してしまいましたが、ここでの敗戦がオリンピック本番の銀メダルにつながったのではないかと思います。

## ■ おわりに

約3ヵ月と短い間でしたが、フランス滞在中は日本では味わえない色々な経験ができ、非常に貴重な体験でした。外国の事情と比較することで日本の医療の良いところや問題点についても深く考えることができました。これまで海外に出ることに億劫になりかけていたところもありますが、外に出てみて初めて分かることも多くありました。同僚や後輩にはこの経験を伝えていくとともに、一度海外に飛び出してみることを勧めたいと思いました。私はフランス語の勉強不足でコミュニケーションが十分に取れなかったことがあったのは残念でした。次回のチャンスのためにも少しずつ勉強を続けたいと思います。

最後に本留学の機会を与えて頂きました日仏整形外科学会の小林会長はじめ役員の方々に厚く御礼申し上げます。また、京都府立医科大学の久保教授、留守中ご迷惑をおかけした整形外科医局の先生方に深謝いたします。さらに、この場を借りて、乳児を抱えて留守をしてくれた妻に感謝したいと思います。



●世界遺産ボン・デュ・ガールにて。バスがなかなか来ず、帰れなくなるかと思いました。

# パリ留学がくれた友情の芽生えと固い絆

日仏整形外科学会 名誉会長・行岡病院 七川 敬 次

前回にも書かせてもらったが半世紀以上も前の経験が今後の若い人に参考になるとはとても思はず、つい書く手が鈍ってしまうが、大橋先生からの依頼に答えなければならず、随分と待ってもらったので何とか責めを果したいと思う。

一番気がかりなのは実用的なフランス語ができないと働けないということであって、半年早く私費留学生として行くことにした。下宿先はフランス語を習っていた近くのカソリックの神父さんが世話してくれた。“テオフィル・ゴージェ”という地下鉄の出入り口から一ブロック郊外(ブローニュの森)に近づいたところにある。下宿のマダムはとても電話での会話は無理と思ったのかコスト教授との連絡をとってくれる。電話はこちらも聞けるようになっていて、本人はどこに居るの?とコスト教授の怪訝な声が聞こえてくる。マダムがいいにくそうに言っているがこちらはよくわか

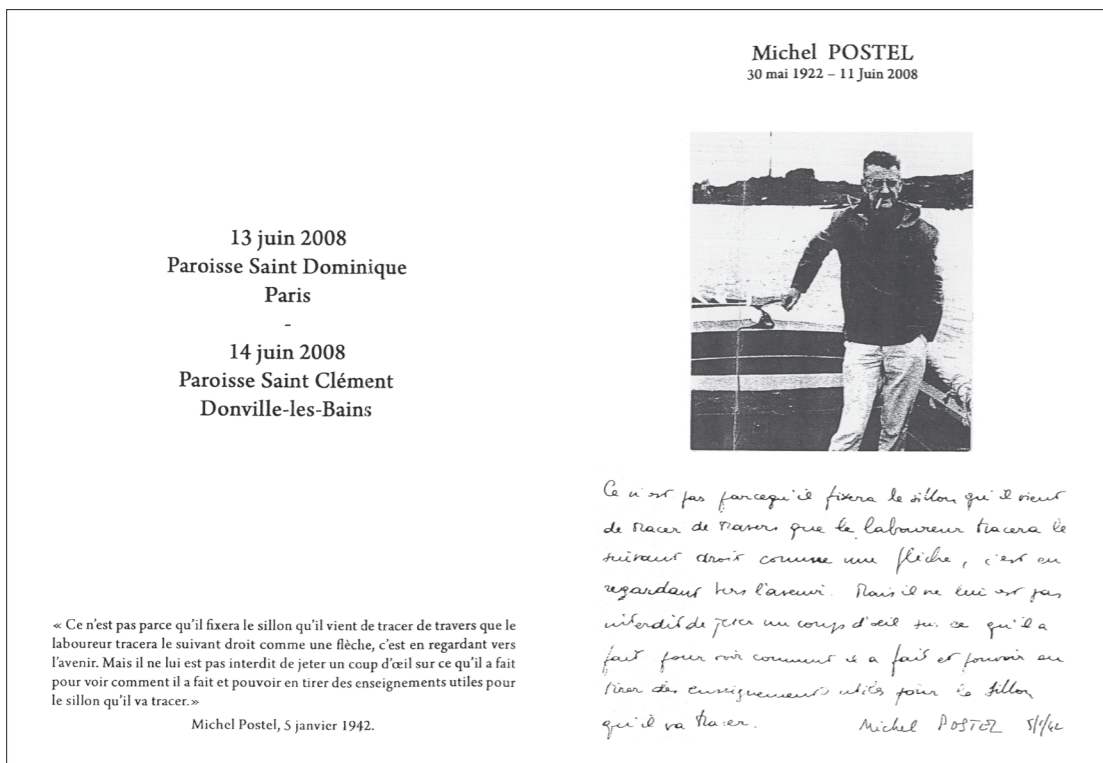
らない。コスト教授にお会いすると、あなたは整形外科医だからとわざわざ向いの整形外科のMerle d'Aubigné教授の部屋まで連れていって紹介してくれた。何でも自由にやって下さいといわれた。おかげでこちらの表向きのアンテルヌ相当の身分(アメリカのレジデントにあたる)のせい(Médecin Résident Etranger)もあって、どこでも誰とでも気がねなく振舞うことができた。教室のポステル教授は当時アンテルヌより一段上のchef de cliniqueだったと思うがよくアンテルヌの食堂(Sall de Garde)へ午餐をとりにきていた。彼はMerle d'Aubigné教授のお気に入り、剃刀のようによく切れる男と繰り返しいわれていた。また整形外科教室とリウマチ学教室との間の連絡係でもあり、コスト教授が肩の患者の診察中、聞きたいことがあるとPostelを呼んでくれといえはすぐにやってくる。どうやらコスト教授にもお気に入りらしかった。私はその人柄に注

目し、惹かれるものがあった。万事控え目で、そのくせ頭が鋭い。Merle d'Aubignéの後継者となり、rapidly destructive coxarthrosisの臨床分離者としてわが国でもよく知られている。また股関節の全関節置換術、なかでもmetal on metalの研究が得意分野で厚い単行本も発刊している。後年日仏整形外科の結成時、役員にリヨンの整形外科医が多かったのでパリの整形外科医を加える必要があると考え、Postel教授は定年退職していたが、SICOTのスナックで一緒になり、一人推薦してほしいという、彼の愛弟子のCourpied教授がよいと言ってくれた。何よりも人柄がよく、協調してやってくれることを強調していた。現在日仏の顧問になっているが、全くPostel氏の言う通りで、大へんお世話になっている。大腿骨頸部骨折後十分恢復せず歩行障害、全身疲労感強く、種々治療法を試みたが、奏功せず最近亡くなったとルヌー教授から知らせがあっ

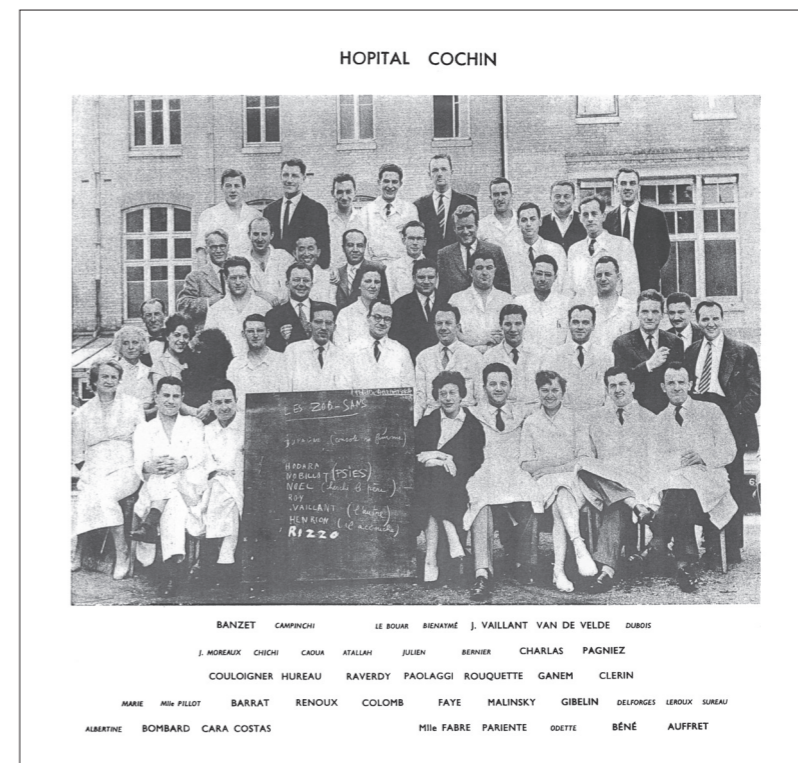
た。いかにも彼らしい写真と詩的文書が出ていたので、ここに掲載して深甚の弔意を表したい(図1)。

リウマチ学の教室の方は専ら臨床研究であって、基礎研究はテーマに応じて他所の病院または研究所でやるようになっていて、午前中の勤務が終わるとフリーになった午後の時間を利用する。現在は大きな研究所(センター)が付設されていて、医者でない基礎研究者が管理しており、リウマチ学の教授が両者を総括する、どこの国にもある組織化が行われている。

整形外科はまだしもリウマチ学の方は症状の理解はできるようになってもdiscussionにはついてゆけない。言葉の綾がわかるとまでいなくても面白味がわいてこない。入院患者のベッドで枕元にはどんな薬が投与されているか書いてあってもみな手書きなのでさっぱりわからない。たとえ日本語であってもそのことに精通していないと話しについてゆけないので、ましてフ



●図1 Prof. Michel Postelの死亡通知(ルヌーDr.から)。彼の詩的な短文もあって味わい深い。



●図2 コシヤン病院のアンテルナーの記念写真(1959)。私は後列から二段目の左から3人目



ランス語となると尚更である。この手頃な解決法はない。日がたって熟してくるのを待つほかない。

驚いたことにコシヤン病院のアンテルヌの中に、後年日仏医学のフランス側の会長になったルヌー教授がアンテルヌとして私と同時代に一般外科のアンテルヌとして働いていたそうである。しかし私がもらった全パリのInternatの記念アルバムには出でこない(図2)。彼は日本語も上手で、日本の文化に興味をもち、伝統、行事、考え方などよく知っている。その上FRANCE JAPON MEDICALというBulletinを発行していた。そのNo25 1998年11月号に“私が会ったはじめての日本人”というタイトルで私のことを書いている。日本語に翻訳したのをここに載せさせてもらうが、悪戦苦闘している自分がどのように見られているか映し出されていて面映いが、再録させてもらうことにする(図3)。

「七川欽次は私が会った最初の日本人で、それは、ずっと以前、やがて40年も前のことで彼はFlorent

Costeの教室にやってきた。それは最近新しく分離されたリウマチ学の分野で一層の訓練、進歩を図るためである。1959年、コシヤン病院のSalle de Garde(住み込み医のための建物。現在はうちこわされている)に出入りしていた。彼と同時代のアンテルヌは外科医としてBienamé、Mlle Pillot、内科医としてR.Pariante、R.Amorが居た。

名前が長いので我々はChichiと呼んでいた。彼はあらゆるパーティに参加していた。彼の小さな体、それに加えてあらゆるフランスのブドウ酒を試してみたいという天晴れな欲望が彼の普段の控え目な態度を失わせることがあった。1975年にF.Costeの後継者となったFlorian Delbarre(図4)の助教授となった私はリウマチ学の学会で再会した。七川欽次は大阪のリウマチ学の教授となり、三重県の久居のリウマチの私的病院の院長となった。七川欽次のすぐれた特色の一つは我々の言葉に通暁していることで、このBulletinにも出て

いるようなフランス語のテキストを書ける。彼の手紙は繊細で正確な文章で我々の祖父母の文章を思い起こさせる\*。最近の自然な書き方ではない。」※私は長い間日本人と結婚したフランスの老婦人からフランス語を習っていた。

なんとといっても病院、特にSalle de gardeの生活の最大の収穫はリウマチ学のアンテルヌの中から生涯の友人ができたことである。不思議なことに、この時の最も親しかった同僚3人が皆後にパリ大学のリウマチ学の教授になっていることで、このうち一人は数年前に亡くなったが後の2人は尚健在で、今日フランスリウマチ学の文字通り大御所的存在になっている(図5, 6)。毎年彼らが開催するリウマチ学会に招待してくれ、いつも出かけるが、残念なことに今年は腰痛のため行けなくなった。

## PORTRAIT

5

### LE PREMIER JAPONAIS QUE J'AIE RENCONTRE



Oui, Shichikawa Kenji est bien le premier Japonais que j'aie rencontré, et ceci remonte à bien longtemps. L'auteur du panorama de l'orthopédie japonaise que vous venez de lire, je le connais en effet depuis bientôt quarante ans. Celui-ci, venu dans le Service de Florent Coste pour se perfectionner en Rhumatologie, discipline alors fraîchement individualisée, fréquentait en 1959 la salle de Garde de Cochin, aujourd'hui détruite. Ses contemporains étaient des chirurgiens comme Bienaymé, Melle Pillot, des médecins comme R. Pariante ou B. Amor.

"Chichi" comme nous l'appelions au mépris de la prononciation correcte de son nom prenait part à tous les tons et sa faible masse corporelle, jointe à son désir louable d'expérimenter toutes les productions des vignobles français lui faisait perdre sa réserve habituelle. Devenu en 1975 adjoint de Florian Delbarre, successeur de F. Coste, je retrouvai dans les Congrès de la discipline, Shichikawa Kenji devenu Professeur de Rhumatologie à Osaka et Directeur d'un Hôpital Rhumatologique privé à Hisai, dans la province de Mie. Un des traits remarquables de Shichikawa Kenji est sa connaissance de notre langue, qui lui permet d'écrire des textes comme celui que nous publions. Ses lettres, toujours manuscrites, sont tracées d'une écriture fine et précise, qui rappelle celles de nos grands-parents et n'a rien du laisser-aller moderne.

●図3 FRANCE JAPON Medical(Bulletin edite par la SociétéFran-Japonaise de Medecin No.25 number 1998)以下省略



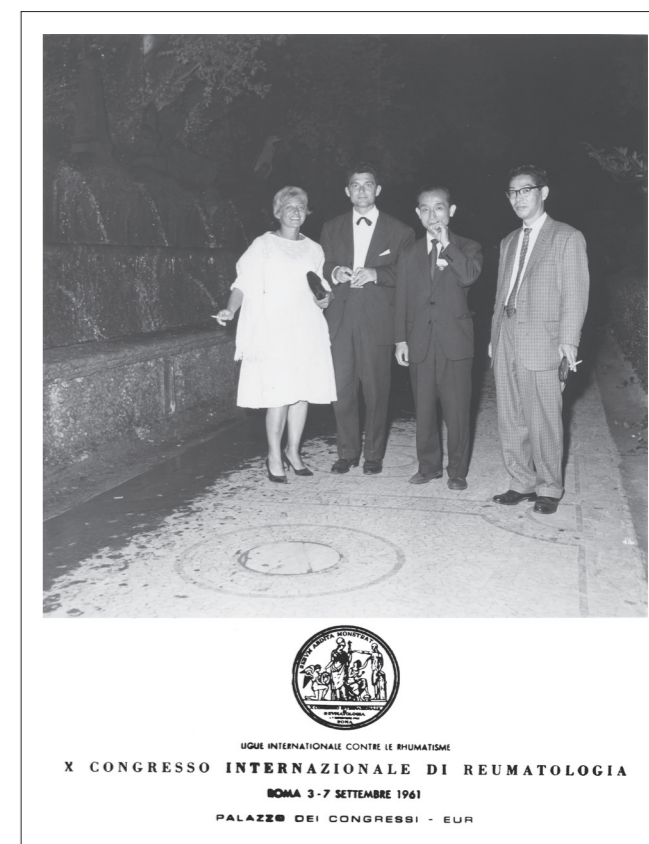
●図4 Florian Delbarre教授を日本リウマチ学会に招待したさいにDecarte賞を頂くところ(1977)

### C'était il y a quelques années

Bonjour Kanji, voici ce que j'ai retrouvé avec toute mon amitié. Magali Bernard vous salue.



●図5 1961年のローマでの国際リウマチ学会でProf. M-F Kahn夫妻と



●図6 Prof. B.Amorが1979年日本リウマチ学会に招待されたさい拙宅で同僚達と

## 日本側・フランス側役員を紹介します

### 日本側役員

名誉会長 七川 歆次  
 会長 小林 晶  
 副会長 瀬本 喜啓  
 書記長 大橋 弘嗣  
 書記 青木 清  
 藤原 憲太  
 幹事 坂巻 豊教  
 金子 和夫  
 安永 裕司  
 久保 俊一  
 名誉会員 小野村敏信  
 日本側公式連絡員 ジラン敬子

### フランス側役員

President Philippe Hemigou (Paris)  
 Secrétaire General Philippe Merloz (Grenoble)  
 Trésorier Philippe Wicart (Paris)  
 Membre de Bureau Philippe Livermeaux (Strasbourg)  
 Alain Durandeu (Bordeaux)  
 Jean Pierre Courpied (Paris)  
 Olivier Guyen (Lyon)  
 Jacques Caton (Lyon)



## 日仏整形外科学合同会議 (AFJO) 開催一覧

会期	開催地	議長
第1回 1990年11月12日	パリ	Régie C. Michel
第2回 1992年10月4日	京都	七川 歆次
第3回 1994年11月7日	パリ	Charles Picault
第4回 1996年4月13～14日	東京	菅野 卓郎
第5回 1998年9月17～19日	リヨン	Jean Pierre Courpied
第6回 2001年5月11～12日	大阪	小林 晶
第7回 2003年9月26～27日	グルノーブル	Philippe Merloz
第8回 2005年5月6～7日	京都	瀬本 喜啓
第9回 2007年9月14～15日	ニース	Jacques Caton
第10回 2009年5月28～30日	沖縄	大橋 弘嗣
第11回 2011年6月2～4日	ボルドー	Arain Durandeu
第12回 2013年5月30～6月1日	京都	飯田 寛和、田中 千晶

## 日仏整形外科学会 (SOFJO) 開催一覧

会期	開催地	会長
第1回 1987年11月6日	神戸	七川 歆次
第2回 1988年10月29日	東京	七川 歆次
第3回 1989年11月11日	大阪	七川 歆次
第4回 1991年11月9日	大阪	七川 歆次
第5回 1993年10月30日	大阪	七川 歆次
第6回 1995年5月10日	大阪	七川 歆次
第7回 1997年11月1日	大阪	七川 歆次
第8回 1999年10月16日	大阪	山野 慶樹
第9回 2000年11月25日	横浜	坂巻 豊教
第10回 2002年10月12日	弘前	原田 征行
第11回 2004年11月6日	神戸	小野村敏信
第12回 2006年10月14日	京都	久保 俊一
第13回 2008年9月27日	東京	金子 和夫
第14回 2010年9月25日	広島	安永 裕司
第15回 2012年9月22日	東京	飯田 哲
第16回 2014年9月6日	福岡	塩田 悦仁

あなたも  
フランス研修に!

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFECOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりです。詳しくは下記のとおりです。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験していただける先生は応募をご遠慮ください。

募 集 要 項

1) 募集人員	若干名（平成26年度）
2) 研修条件	<ol style="list-style-type: none"> <li>滞在期間は3か月間を原則とする。 この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。 1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。</li> <li>フランスでの滞施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。</li> <li>費用について a) 渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。 b) フランス滞在中の滞在費、食費および移動などの費用は原則として自己負担とする。</li> <li>帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。</li> <li>本年度の研修開始時期は4月以降とする。</li> </ol>
3) 応募条件	<ol style="list-style-type: none"> <li>応募者は日仏整形外科学会会員であること。</li> <li>2. 応募者は日本整形外科学会専門医であること。</li> <li>3. 原則として40才を応募年齢の上限とする。</li> <li>4. 勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。</li> <li>5. フランス語または英語を話すもの。</li> </ol>
4) 応募に必要な書類	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日仏整形外科学会交換研修申請書（TXT, PDFをダウンロード・毎年様式が変わるので、注意する事）</li> <li>2. 履歴書（大学卒業以降とする）</li> <li>3. 応募の動機や抱負についての小論文</li> <li>4. 日仏整形外科学会会員1名の推薦状—推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。</li> <li>5. 業績目録—主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要）</li> <li>6. 渡仏承諾書 a) 大学の医局勤務者……………教授の承諾書 b) 病院または施設勤務者……………勤務している病院または施設の責任者の承諾書 (大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。)</li> </ol> <p>以上1. 以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、コピーを12部を同封すること。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>7. 連絡用住所シール（5枚）……………希望する連絡場所を記入してあて先は～～～先生としてください。</li> </ol>
5) 選考方法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は平成25年7月上旬に個別に連絡する。</li> <li>2. 書類選考に合格したのものには平成25年8月上旬に大阪府済生会中津病院において面接を行う予定である。面接の時間は個別に通知する。</li> <li>3. 合否は平成25年8月中旬に通知する。</li> <li>4. 合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。</li> </ol>
6) 申請締め切り	平成25年6月30日必着
7) 申し込み先	<p>日仏整形外科学会事務局 大阪府済生会中津病院整形外科内 〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39 大阪府済生会中津病院整形外科 Tel(06)6372-0333 Fax(06)6372-0339</p> <p style="text-align: right;">日仏整形外科学会 係 大橋 弘嗣</p>

フランス人研修医  
受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFECOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ヶ月間ですが、1ヶ月でも2ヶ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話す事が条件になっております。また日仏間の旅費はSOFECOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付ください。

日仏整形外科学会 会長 小林 晶  
日仏整形外科学会 交換研修係 小林 晶  
連絡先：大阪府済生会中津病院整形外科

〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39  
TEL 06-6372-0333（お問い合わせは大橋弘嗣まで）  
LU7H-00HS@asahi-net.or.jp



# 第12回日仏整形外科合同会議 開催のご案内

## (Congrès AFJO 2013)

### 第12回日仏整形外科合同会議 (AFJO) 開催に向けて

2011年のボルドーでの第11回日仏整形外科合同会議で関西医大の飯田寛和教授と共同で第12回日仏整形外科合同会議を京都にて開催する運びとなりました。2013年(平成25年)5月30日木曜日から6月1日土曜日に開催を予定しています。テーマは“From the New Points of View”です。新しい視点からの整形外科を視るような演題のほかあらゆる分野の演題を歓迎致します。フランスからは私の留学時代からの友人である股関節のLuc Kerboullや膝のPhilippe Neyretの他、脊椎のPierre RoussoulyやDual MobilityのOlivier Guyenらの講演を予定しています。人工股関節再建や脱臼の問題、Patellar InstabilityやUKA、脊柱のSagittal Balanceなどのテーマで講演して頂きます。これらはフランスのオリジナリテの高い内容であることに疑う余地はありません。日本側からも多くのご発表を期待しております。

AFJOは学術面での交流の場ですが、整形外科医療はその国の文化背景なくして存在しないことは言うまでもないことです。遠く離れた日仏二国の文化の相互理解がお互いの整形外科をより良く理解することに繋がると確信しております。文化交流の面では、5月30日のregistrationと全員参加のWelcome Cocktail Partyを京都岡崎にある細見美術館で行います。珠玉の日本美術を見て、細見良行館長による特別講演を企画しております。フランス総領事らの来賓の参加も予定しております。5月31日と6月1日にScientific programを組んでおり、5月31日金曜日夕方には参加者全員のために清水寺の特別拝観と経堂をお借りしての狂言鑑賞を企画しています。清水寺の格別のご厚意により、清水寺成就院にての夕食会(席数限定ですが)も予定しています。日本を代表する京都の美的エレガンスを参加者の皆様にお伝えし、日本とフランスの学術的交流と文化的交流がさらに深める一助となればこの上ない幸せです。

さて私がフランスに留学致しましたのは1988年秋でした。飯田寛和教授の教室の和田孝彦先生や稟賢一先生の先輩留学生にあたります。当時の京大整形外科の山室隆夫教授の勧めでParisのBichat(ビシャ)病院のDuparc(デュパルク)教授のもとにCollege de Medicine des Hopitaux de Parisの給費をいただいて留学致しました。1990年2月からCochin(コシャン)病院のKerboull(ケルブール)教授のもとで主に人工股関節の勉強をして、1991年に帰国いたしました。この両教授のお蔭で私は股関節外科とりわけ人工股関節分野を自らのテーマにしようと決意しました。フランスの整形外科は基礎研究よりも独創的なアイデアを臨床に応用し、手術症例から学ぶという姿勢が重視され、多くの手術症例から治療法の改善のための努力がな

されてきました。ほとんどの整形外科医は職歴を終えるまで手術をやり続けて生計を立てるわけで、手術をしない整形外科医は皆無と言えます。

留学中に両教授の他に短期間ながらも、BernのMueller教授、HamburgのEndoklinik、米国のEngl先生のもとで勉強の機会を得たことが、自分の考えに自信を与えてくれたように思います。その上、当時のトップリーダーであった今は亡きLyonのH.Dejour教授とParisのRoy-Camille教授とにそれぞれ膝関節と脊椎を教えていただいたことはフランス人整形外科医も羨むような贅沢でありました。またフランス整形外科と同時にフランスの文化を知ることによって、治療法はその土地の文化に根ざしたものが選択されるということを考えさせられました。これらの経験は帰国後の私の整形外科医としての人生の支えとなっています。恩師Marcel Kerboull教授や息子のLuc Kerboullや留学当時とともに働いたPascal Vieら多くのフランス人InterneやAssistantとの交流やフランス仲間である大橋弘嗣先生や瀬本喜啓先生や金子和夫先生や大先輩の小林晶先生と親しくさせていたことは私にとって大変幸せなことです。帰国後もClarac教授やDurandeau教授との親交や京都市立病院整形外科に受け入れたフランス人交換留学生のOlivier CharroisやFrancois Lintzらとの交流は続いております。同門の後輩である藤原正利先生、高橋忍先生、池永稔先生らがフランスに留学して現在活躍しております。今回日仏整形外科学会会長の小林晶先生(H.Dejour教授の親友)からご指名を頂き、第12回のAFJOを開催することはフランス整形外科に対する僅かながらも恩返しになるかと考えております。

シャルコー、パストゥール、キュリー、モノー、モンタニエやリスフラン、オリエ(オリエール)、デュピュイトラン、ジュデー、メルル・ドビニエー、トリヤーを生んだフランス医学や整形外科と奥深いフランス文化を若い先生方には是非とも体験していただきたいと思います。これは単なるフランス礼賛ではなく、真に日本の整形外科と文化の素晴らしさを理解するためにも重要なことであると私は確信しております。第12回AFJOが交流の良い機会になることを期待しております。再度、日仏整形外科学会会員の皆様のご参加を心からお願い申し上げます。

京都市立病院整形外科 田中千晶(c.tanaka@kyoto.zaq.jp)



## 日本側参加者のための第12回日仏整形外科合同会議 (AFJO)

### のご案内—第4報

第12回 AFJO を京都市左京区の芝蘭会館稲盛ホール<sup>\*</sup>にて下記の日程で開催致します。

#### 1) 予定プログラム

2013年5月30日(木曜日) 午後 Registration と Welcome Cocktail Party<sup>\*\*</sup>

31日(金曜日) Scientific Session

夕方から清水寺特別拝観と狂言鑑賞

清水寺成就院にて Banquet<sup>\*\*\*</sup>

6月1日(土曜日) 午前 Scientific Session

<sup>\*</sup><http://office.med.kyoto-u.ac.jp/siran/index.htm>

<sup>\*\*</sup>細見美術館 <http://www.emuseum.or.jp/> にて参加登録後に全員歓迎会を予定

<sup>\*\*\*</sup>清水寺成就院 <http://www.kiyomizudera.or.jp/info/info21.html>

#### 2) 演題募集

「新しい視点から」をテーマとして、その他にも幅広く整形外科の各領域の演題 (oral or poster) を募集いたします。発表は全て英語をお願いいたします。

Abstract form (MS Word2003) はこの第4報に添付しております。

第12回日仏整形外科合同会議(AFJO)事務局まで e-mail で提出願います。

[afjo2013@hirakata.kmu.ac.jp](mailto:afjo2013@hirakata.kmu.ac.jp)

Abstract form 提出締切は2013年2月28日です。

採用通知は2013年3月31日までに e-mail で連絡いたします。

多くの皆様の参加を期待しております。

関西医科大学 飯田寛和

京都市立病院 田中千晶

第12回日仏整形外科合同会議(AFJO)事務局

関西医科大学整形外科学教室 担当: 中東千恵子 [afjo2013@hirakata.kmu.ac.jp](mailto:afjo2013@hirakata.kmu.ac.jp)

日仏整形外科学会 (SOFJO) <http://www.sofjo.gr.jp>

### 3) 参加登録

#### 登録費

Category	早期参加登録 2013/3/31 まで	後期参加登録 2013/4/30 まで	当日参加登録
一般参加者	25,000 円	30,000 円	35,000 円
同伴者	10,000 円	15,000 円	20,000 円
Banquet <sup>1)</sup>	7,000 円	7,000 円	

一般参加者登録費に含まれるもの: 会議へ参加、細見美術館展示鑑賞<sup>2)</sup>、歓迎カクテルパーティー<sup>3)</sup>、清水寺特別拝観<sup>4)</sup>、清水寺での狂言鑑賞<sup>5)</sup>

同伴者登録費に含まれるもの: 細見美術館展示鑑賞、歓迎カクテルパーティー、Lady's Program<sup>6)</sup>、清水寺特別拝観、清水寺での狂言鑑賞

1) Banquet は江戸時代初期の名庭園「月の成就院庭園」と賞される国の「名勝」を有する清水寺成就院にて予定しておりますが、参加人数に制限があります。希望者を募ったのちに参加決定者に事務局から連絡をいたします。

2) 細見美術館の名品を鑑賞した後に、細見館長の特別講演を予定しております。

3) 歓迎カクテルパーティーは細見美術館ホールにて来賓を迎えて行います。

4) 清水寺特別拝観は一般拝観終了後に第12回 AFJO のために行われます。

5) 狂言鑑賞は清水寺の経堂に設営して狂言を鑑賞していただく予定です。

6) Lady's Program はフランス人から見た京都の文化を市中散策をしながら解説する企画です。

参加登録申込書: SOFJO の homepage : <http://www.sofjo.gr.jp> にも掲載しております。

宿泊について: ホテル等の斡旋は日本側参加者に対しては行っておりません。

## 第12回 日仏整形外科合同会議 (AFJO) 参加登録申込書

以下の項目を記入して第12回日仏整形外科合同会議(AFJO)事務局まで e-mail で提出願います。 [afjo2013@hirakata.kmu.ac.jp](mailto:afjo2013@hirakata.kmu.ac.jp)

(SOFJO : <http://www.sofjo.gr.jp>にこの申込書を掲載しております。)

申込者 氏名 (日本語)

(英語表記)

Title の選択 Prof. Dr. Mr. Mrs.

所属機関名

住所 (郵便番号込)

勤務先

自宅

連絡先 メールアドレス

電話番号

Fax

一般参加者登録費 (含まれるもの: 会議へ参加、細見美術館展示鑑賞、歓迎カクテルパーティー、清水寺特別拝観、狂言鑑賞)  早期 25,000 円  後期 30,000 円

同伴者参加登録費 (含まれるもの: 細見美術館展示鑑賞、歓迎カクテルパーティー、Lady's Program、清水寺特別拝観、狂言鑑賞) 10,000 円 × \_\_\_ 人 = \_\_\_ 円

合計 円

\*Banquet 申し込みの希望  有  無 \_\_\_ 人

(国の「名勝」に指定されている江戸時代初期の名庭園を有する清水寺成就院にての Banquet は参加人数に制限があります。希望者を募ったのちに参加決定者に事務局から連絡を差し上げます。その後に 7,000 円/人の振り込みをお願い致します。)

お支払方法: 銀行振り込み (振り込み手数料は自己負担でお願いいたします。)

銀行名: みずほ銀行 枚方支店

口座番号: 普通 1969961

口座名義: 第12回日仏整形外科合同会議

(ダイジュウニカイニチフツセイケイグカゴウドウカイギ)

締切: 早期登録: 2013年3月31日まで 後期登録4月30日まで

注意事項: 申込書の提出と銀行振り込みをもって参加申し込みの完了といたします。振込後のキャンセルはお受けできず、払い戻しは行いません。領収書は学会当日に発行します。

# 第16回日仏整形外科学会

(16ème Réunion de Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)

## 開催のご案内

第16回SOFJOを下記の要領で福岡市にて開催させていただきます。整形外科・リハビリテーションの各領域に関する演題を広く募集する予定にしております。多数の皆様のご参加とご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

福岡大学医学部リハビリテーション部 教授 塩田悦仁

### 記

【会 期】 2014年(平成26年)9月6日(土)

【会 場】 アクロス福岡  
〒810-0001 福岡市中央区天神一丁目1番1号  
Tel. 092-725-9111  
<http://www.acros.or.jp/>

【大 会 長】 塩田悦仁(福岡大学医学部リハビリテーション部)

【連 絡 先】 〒814-0180 福岡市城南区七隈七丁目45番1号  
福岡大学医学部リハビリテーション部 塩田悦仁  
Tel. 092-801-1011 Fax.092-862-8200  
E-mail : [shiota@fukuoka-u.ac.jp](mailto:shiota@fukuoka-u.ac.jp)

※演題募集、宿泊案内、その他の詳細につきましては、第2報以降お知らせいたします。



## 1



### 日仏整形外科学会ボランティアグループ 「パピヨン」 に入会しませんか

—— Equipe bénévole pour la SOFJO (AFJO) ——

日仏整形外科学会の活動を支えていただくために1996年4月に結成されました。

まず1996年4月13日・14日に東京で開催された第4回日仏整形外科合同会議のお手伝いをするために10数名の先生や関係の方々に登録していただき、会議の開催に協力していただきました。

今後も日仏整形外科学会の運営をお手伝いしていただける先生ならびに一般の方々にボランティアとしてご登録いただき、可能な時間にお手伝いをお願いしたいと思っております。

日仏整形外科学会の会員または会員1名の推薦を受けた方なら誰でも入会できます。

日常的な簡単な英会話ができれば、フランス語は必ずしも必要ではありません。もちろんフランス語のできる方は大歓迎です。シンボルマークは蝶のマークです。

Papillonに関するお問い合わせ、入会申込は日仏整形外科学会事務局、大橋弘嗣まで。

## 2



Welcome to So.F.J.O Homepage  
ようこそ日仏整形外科学会 (SOFJO) のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

<http://www.sofjo.gr.jp/>

です。  
是非のぞいてみてください。

- ・新着/NEWS
- ・沿革
- ・活動内容
- 入会のご案内
- ・役員紹介
- ・共同研究
- ・交換研修
- 交換研修帰朝報告
- ・会誌INFOS
- ・仏日・日仏整形外科用語集
- ・日仏整形外科協議会 (AFJO)
- ・AFJO (English)
- ・日仏整形外科学会ボランティアグループ
- ・関連リンク集

## 3

### 平成23年度会計報告

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	1,291,000
会員寄附	50,000
企業寄附	700,000
広告料	620,000
預金利息	283
前年度繰越金	3,151,452
計	5,812,735

歳出の部	(単位：円)
日本人交換整形外科医奨学金	
渡航費+滞在費 (一部)	620,780
フランス人交換整形外科医奨学金 0名	0
SOFJO/AFJO開催関係費	0
日仏整形外科学会関連事業 (表彰など)	0
日仏共同研究、研究助成金	0
森崎日仏整形外科学用語集編纂事業	346,010
インターネットホームページ維持管理費	365,880
コンピューター関連費	0
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	48,310
事務費	63,871
アルバイト代	224,000
会議費	23,469
旅費・交通費	55,320
連絡員費用 (ジランさん)	108,126
印刷費	546,000
雑費	2,730
出金小計	2,404,496
次年度繰越金	3,368,239
計	5,772,735

### 平成24年度事業費予算編成

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	1,000,000
企業寄附金	700,000
広告料	800,000
預金利息	300
前年度繰越金	3,368,239
計	5,868,539

歳出の部	(単位：円)
日本人交換整形外科医奨学金	
渡航費+滞在費 (一部) 100,000×4名	400,000
フランス人交換整形外科医奨学金	
滞在費 (2ヶ月) + 交通費 100,000×2名	200,000
SOFJO/AFJO開催関係費	1,000,000
日仏整形外科学会関連事業 (表彰など)	50,000
日仏共同研究、研究助成	50,000
森崎日仏整形外科学用語集編纂事業	400,000
インターネットホームページ維持管理費	400,000
コンピューター関連費	0
事務局 (通信費、事務費、アルバイト代)	
通信費	100,000
事務費	100,000
アルバイト代	300,000
会議費	100,000
旅費・交通費	200,000
連絡員費用 (ジランさん)	100,000
印刷費	500,000
予備費	100,000
出金小計	4,000,000
次年度繰越金	1,868,539
計	5,868,539

## 4

### これまでに交換研修に 参加された先生方

年度	氏名	所属医局
1990	稲毛 昭彦	大阪医科大学
1991	三輪 隆	帝京大学
1991	末松 典明	旭川医科大学
1992	星 忠行	弘前大学
1992	村上 元庸	滋賀医科大学
1992	久保 俊一	京都府立医科大学
1993	小浦 宏	岡山大学
1994	西川 真史	弘前大学
1994	岩崎 幹季	大阪大学
1995	石澤 命仁	滋賀医科大学
1995	安永 裕司	広島大学
1996	安間 基雄	順天堂大学
1996	寺門 淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応義塾大学
1997	益田 和明	岐阜大学
1997	金子 和生	山口大学
1998	山川 徹	三重大学
1998	岡本 雅雄	大阪医科大学
1999	清重 佳郎	山形医科大学
1999	川崎 拓	滋賀医科大学
2000	宮本 敬	岐阜大学
2000	藤井 一晃	弘前大学
2000	細野 昇	大阪大学
2001	鳥飼 英久	千葉大学
2001	久我 尚之	九州大学
2002	瀧川 直秀	大阪医科大学
2002	松峯 昭彦	三重大学
2003	柘原 俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹 有里	慶応義塾大学
2004	和田 孝彦	関西医科大学
2004	久留 隆史	広島大学
2004	小山内俊久	山形大学
2005	小田 幸作	高槻赤十字病院
2005	松尾 篤	九州大学
2006	小室 元	阪和住吉総合病院
2006	城戸 顕	奈良県立医科大学
2006	早稲田明生	国際親善総合病院
2007	益田 宗彰	総合せき損センター
2007	黒住 健人	高知医療センター
2007	菊池 克久	滋賀医科大学整形外科

## 5

### これまでにフランスから 交換研修医として 来られた先生方と研修施設

年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LIVERNEAUX	京都府立医科大学・ 広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・ 滋賀小児センター・ 福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・ 九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・ 東海大学・ 札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・ 岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・ 新潟手の外科研究所・ 広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・ 岡山大学・ 国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・ 福岡県立柏屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・ 京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・ 慶応義塾大学・ 高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・ 山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・ 大阪市立大学
2007	Damien BREITEL	総合せき損センター・ 奈良県立医科大学
2007	Sybille FACCA	弘前大学・山形大学・ 京都府立医科大学・ 広島大学
2008	Thomas APARD	山形大学・ 大阪府立母子保健総合医療センター
2009	François LINTZ	京都市立大学

## 6

### 仏日整形外科学用語集改訂について

仏日整形外科学用語集は森崎直木先生が編集を行われ、1989年に第1版が文光堂から出版されました。その後、1991年に改訂版が出版されましたが、森崎直木先生が亡くなられて以降、改訂されることなく現在に至りました。フランスの整形外科を知るためにはどうしてもフランス語の論文を読む必要がありますので、森崎先生の仏日整形外科学用語集は非常に有用な辞書でした。しかし、医学の進歩に用語集も追いついて行く必要があると考え、日仏整形外科学会が中心となって用語集の改訂を行うことにいたしました。

先日お知らせしましたようにインターネットのホームページに試用版を掲載しました。その後、修正を加えた修正版を掲載しております。Excelファイルで作成しておりますので、ご自由にダウンロードしてご使用ください。なお、誤り等がございましたら事務局までご連絡ください。随時修正してより完成度の高い用語集にしていきたいと考えております。また、お手元においていただいても使えるようにと、出版の準備も進めております。今年の5月頃に出版予定としております。是非、多くの先生方にお使いいただき、フランス語の論文に触れる機会が多くなればと期待しています。

### 編集 後記

本学会は1987年に第1回日仏整形外科学会が神戸で行われて以来、四半世紀が過ぎました。その間、会員の先生方をはじめ、多くの方のご支援を戴き、昨年東京で行われました第15回の学会では230名を超える参加者があったとのことで、ますますフランスに関心を持たれている先生が増えてきているように感じました。また、交換研修の方も応募が増え、来年度の交換研修医として10名が認められました。このようなことから、「INFOS」もますます充実していくものと期待しています。

今回は第15回日仏整形外科学会(SOFJO)について会長を務められました飯田哲先生に報告とともに多くの写真を頂きました。フランスから5名の医師を招待され、行き届いたもてなしの中で日仏の交流が十分に行われました。フランス整形外科学会(SOFCOT)の報告をフランス留学中の本間康弘先生から頂きました。一昨年は田中千晶先生、そして昨年は金子和夫先生がSOFCOTの名誉会員に推挙され、SOFCOTにおける日本の占める役割も大きくなってきているようです。お楽しみの交換研修帰朝報告は4名の先生から頂きました。どれも迫力ある文章で、交換研修に行きたいとそそられるのかも分かりません。今回も日仏整形外科交流の創世記を七川寛次先生にお願いしました。日仏整形外科交流の原点をお書きいただき、貴重な資料になるものと思います。

2010年から取り組んで参りました仏日整形外科学用語集はようやく完成に近づいてきました。森崎直木先生が作られました用語集を基にして多くの新語を加えました。作製にあたりましては日本整形外科学会学術用語委員会を務められたこともある会長の小林晶先生のご指示に寄るところが多く、多大な労力を注いでいただきました。また、最後には日本整形外科学会学術用語委員会から丁寧な意見を頂きました。紙面をお借りしましてあらためて御礼申し上げます。

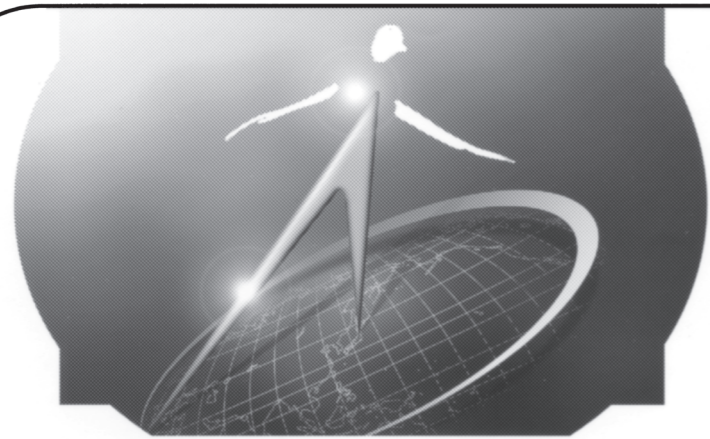
今年は5月30日から6月1日まで京都で第12回日仏整形外科合同会議(AFJO)が行われます。フランスから多くの先生が来られる予定のようです。日本からもたくさん先生の参加をお待ちしています。詳しくはホームページをご覧ください。

## 7

寄附金を頂戴いたしました。  
ご協力ありがとうございました。

- サントリーホールディングス株式会社
- 日本リマ株式会社
- ビー・ブラウンエースクラブ株式会社
- ヤンセンファーマ株式会社
- センチュリーメディカル株式会社
- 参天製薬株式会社
- 第一三共株式会社
- 日本イーライリリー株式会社
- 旭化成ファーマ株式会社
- 有限会社永野義肢
- 川村義肢株式会社 (順不同)





**ARTZ<sup>®</sup>**  
**ARTZ Dispo<sup>®</sup>**

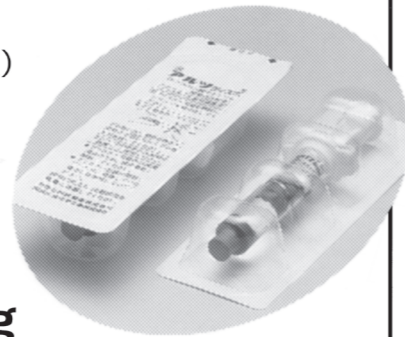
関節機能改善剤 (ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液)

指定医薬品 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

**アルツ<sup>®</sup> 関節注25mg**

指定医薬品 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

**アルツ<sup>®</sup> ディスポ<sup>®</sup> 関節注25mg**



ブリストー包装内滅菌済

特許登録—日本国特許第3831505号；第3845110号(医療用滅菌包装における滅菌方法)

(製造販売元) 生化学工業株式会社  
東京都千代田区丸の内1丁目6-1



経皮吸収型鎮痛消炎貼付剤

指定医薬品

**アドフィード<sup>®</sup>**  
**パップ40mg/80mg**

(フルルビプロフェン製剤)

(製造販売元) リードケミカル株式会社  
富山県富山市日俣77-3

- 各製品の効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等の詳細は、製品添付文書をご参照ください。
- 各製品共、薬価基準収載

 **科研製薬株式会社**

[発売元・資料請求先] 〒113-8650 東京都文京区本駒込2丁目28-8

07L4  
(2008年9月作成)



 **AquaLife 誕生**

見えない革新。

ポリエチレンの特性はそのままに、摺動面を低摩耗化した技術。  
それは、人工関節における「見えない革新。」  
日本発、人工関節の未来を変える“革新”を目指して。

[www.aqualife.jp](http://www.aqualife.jp)

**京セラメディカル株式会社**

大阪本社 大阪府淀川区宮原3丁目3-31(上村ニッセビル10F) 〒532-0003 Tel.06-6350-1057  
東京事業所 東京都新宿区西新宿2丁目4-1(新宿NSビル10F) 〒163-0810 Tel.03-5339-3645

札幌営業所 Tel.011-280-6020 大宮営業所 Tel.048-640-7779 京都営業所 Tel.075-353-4322 神戸営業所 Tel.078-230-2531 広島営業所 Tel.082-212-1003  
東北営業所 Tel.022-216-5176 名古屋営業所 Tel.052-930-1481 大阪営業所 Tel.06-6350-1017 岡山営業所 Tel.086-803-3620 九州営業所 Tel.092-452-8140

<http://kyocera-md.jp/>

# 健康と豊かさを担う責任 Partner in Healthcare

Spine/Joint prosthesis/Trauma

先進医療機器の普及を通して  
社会に積極的に貢献していくこと、  
それが、私たちのハートです。

Partner in Healthcare  
**Century Medical, Inc.**

センチュリーメディカル株式会社

本社：〒141-8588 東京都品川区大崎 1-11-2  
URL: www.cmi.co.jp

営業第7部(脊椎インプラント関連)  
TEL.03-3491-0253  
FAX.03-3491-2788

営業第3部(人工関節・外傷関連)  
TEL.03-3491-1681  
FAX.03-3491-2788

# 骨形成 促進剤 という選択肢。

BMD増加効果と骨折発生リスクの抑制

- 【禁忌(次の患者には投与しないこと)】
1. 高カルシウム血症の患者[高カルシウム血症を悪化させるおそれがある。] [重要な基本的注意]の項参照
  2. 次に掲げる骨肉腫発生リスクが高いと考えられる患者[「その他の注意」の項参照]
    - (1) 骨ページェット病の患者
    - (2) 原因不明のアルカリフォスファターゼ高値を示す患者
    - (3) 小児等及び若年者で骨端線が閉じていない患者[「小児等への投与」の項参照]
    - (4) 過去に骨への影響が考えられる放射線治療を受けた患者
  3. 原発性の悪性骨腫瘍もしくは転移性骨腫瘍のある患者[症状を悪化させるおそれがある。]
  4. 骨粗鬆症以外の代謝性骨疾患の患者(副甲状腺機能亢進症等)[症状を悪化させるおそれがある。]
  5. 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳婦[「妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照]
  6. 本剤の成分又はテリパラチド酢酸塩に対し過敏症の既往歴のある患者

【効能・効果】 骨折の危険性の高い骨粗鬆症

＜効能・効果に関連する使用上の注意＞ (1)本剤の適用にあたっては、低骨密度、既存骨折、加齢、大腿骨頸部骨折の家族歴等の骨折の危険因子を有する患者を対象とすること。(2)男性患者での安全性及び骨折予防効果は確立していない。

【用法・用量】 通常、成人には1日1回テリパラチド(遺伝子組換え)として20μgを皮下に注射する。なお、本剤の投与は24か月間までとする。

＜用法・用量に関連する使用上の注意＞ (1)本剤を投与期間の上限を超えて投与したときの安全性は確立していないので、本剤の適用にあたっては、投与期間の上限を守ること。[「その他の注意」及び「臨床成績」の項参照] (2)本剤の投与をやむを得ず一時中断したのちに再投与する場合であっても、投与日数の合計が24か月を超えないこと。また、24か月の投与終了後、再度24か月の投与を繰り返さないこと。(3)他のテリパラチド製剤から本剤に切り替えた経験はなく、その安全性は確立していない。なお、他のテリパラチド製剤から本剤に切り替えたときにおける本剤の投与期間の上限は検討されていない。[「その他の注意」の項参照]

【副作用の発現】 1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) (1)腎障害のある患者[外国の臨床試験において、重症の腎障害患者では血中からのテリパラチドの消滅が遅延が認められている。] [薬物動態]の項参照 (2)重症の肝障害のある患者[本剤の重症の肝障害患者における使用経験が少なく安全性は確立していない。] (3)尿路結石のある患者及びその既往歴のある患者[本剤の投与により、症状を悪化させるおそれがある。] 2. 重要な基本的注意 (1)本剤の薬理作用により、投与後約4から6時間を最大として一過性の血清カルシウム値上昇がみられる。また、血清カルシウム値は投与後16時間ではほぼ基準値まで下降することが知られているため、本剤投与患者における血清カルシウム値を測定評価する場合は、本剤投与後16時間以降の測定値を評価基準とすること。本剤の投与にあたっては、患者に十分な説明を行い、特に嘔吐、腹痛、便秘、倦怠及び筋力低下等の持続性の血清カルシウム値上昇が疑われる症状が認められた場合は、速やかに診察を受けるように指導すること。持続性高カルシウム血症の診断は、血清カルシウム値と測定時点を考慮し、持続性高カルシウム血症と判断された場合は、本剤の投与を中止すること。なお、血清カルシウム値上昇によりシキタリスの作用が増強することがあるため、シキタリス製剤と併用する時は注意を要すること。[「相互作用」の項参照] (2)副甲状腺ホルモンは血管平滑筋の収縮作用や心筋への陽性変時陽性変力作用を示すことが報告されている。心疾患のある患者には、患者の状態を観察し、病態の悪化がないか注意しながら本剤を投与すること。(3)腎障害のある患者においては、定期的に腎機能検査を行うこと。(4)閉経前の骨粗鬆症患者での安全性及び有効性は確立していない[*Saag KG, et al. Arthritis Rheum. 60, 3346-3355, 2009*]。 (5)起立性低血圧、めまいがあらわれることがあるので、高所での作業、自動車の運転等危険な作業を行う作業に従事する場合には注意を要すること。 3. 相互作用 併用注意(併用に注意すること) 活性型ビタミンD製剤(アルファカルシドール、カルシトリアル、マキカルシトール、フレリカルシトール、エルテカルシトール等)、シキタリス製剤(シキタリス等) 4. 副作用 国内のプラセボを対照とした臨床試験において、本剤10~40μg/日を投与した安全性評価対象252例中50例(19.8%)に副作用(臨床検査値異常を含む)が認められた。主な副作用は、血中尿酸上昇9例(3.6%)、頭痛7例(2.8%)、悪心7例(2.8%)、ALP上昇5例(2.0%)、筋痙攣3例(1.2%)、高尿酸血症3例(1.2%)、食欲不振3例(1.2%)、血中尿酸上昇3例(1.2%)であった。なお、プラセボを投与した105例中11例(10.5%)に副作用(臨床検査値異常を含む)が認められた。

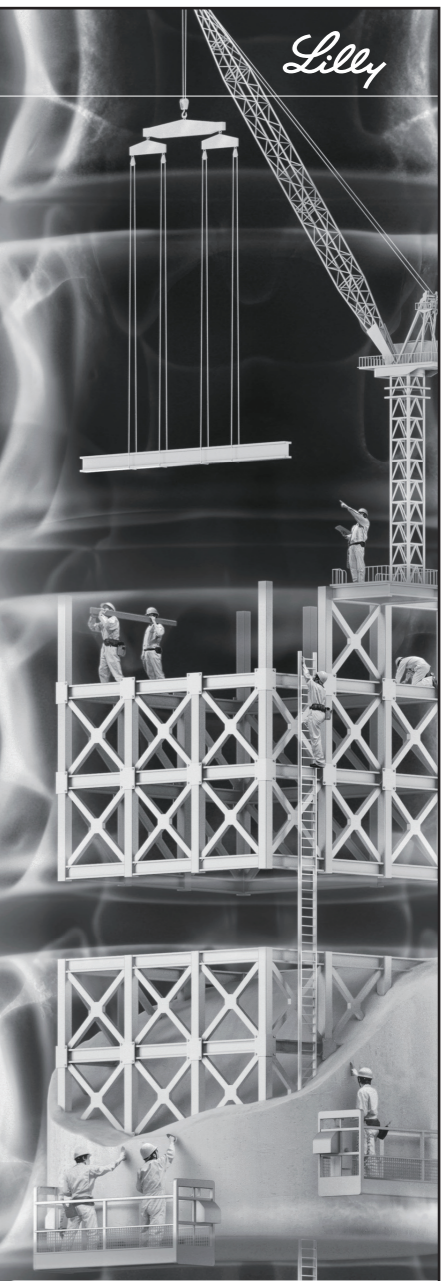
【用法・用量】 通常、成人には1日1回テリパラチド(遺伝子組換え)として1日1回20μg皮下投与である。

【その他の使用上の注意】 本剤の用法用量はテリパラチド(遺伝子組換え)として1日1回20μg皮下投与である。

その他の使用上の注意については製品添付文書をご参照ください。

2011年10月改訂(第7版)

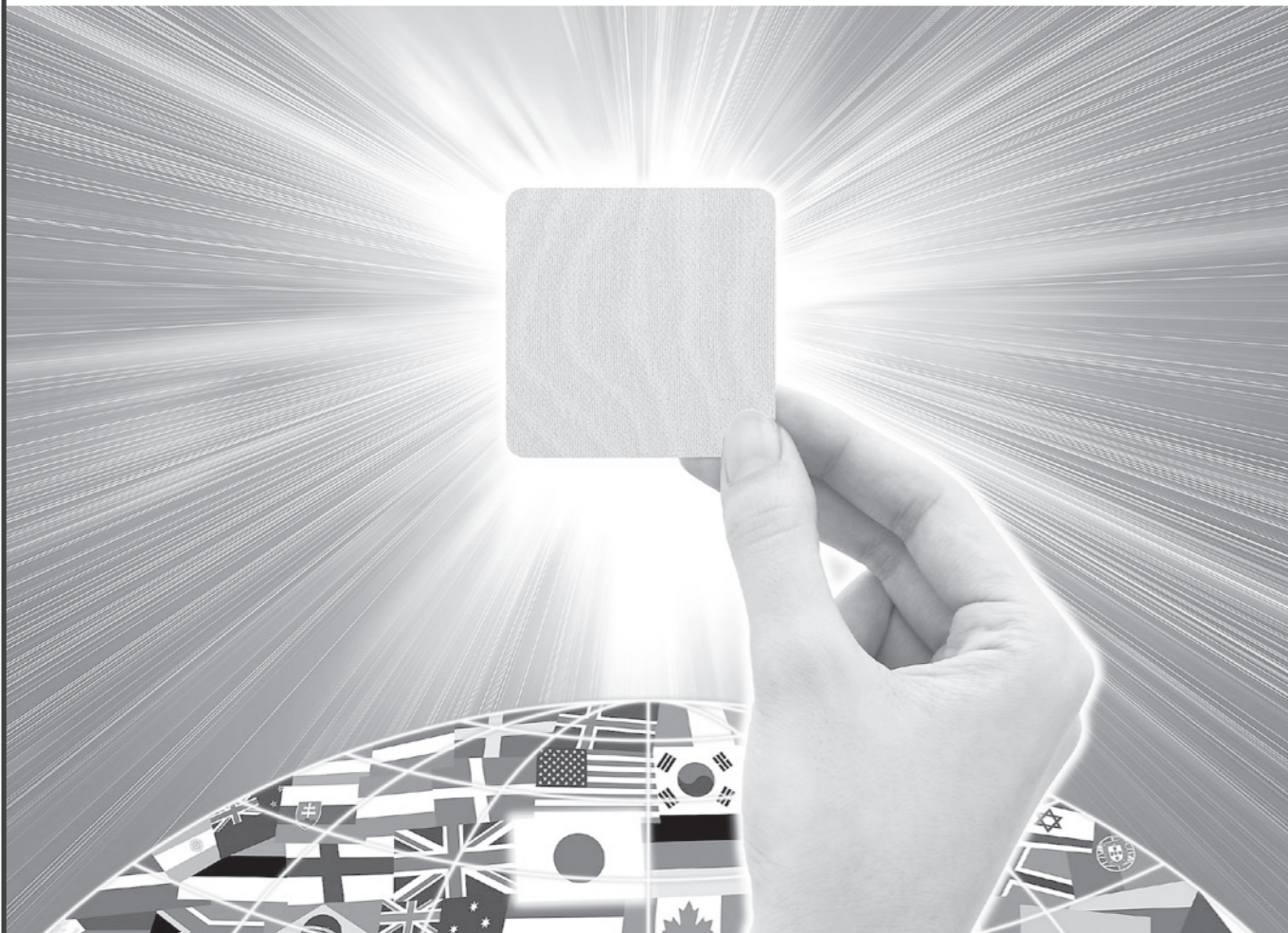
製造販売元(資料請求先)  
**日本イーライリリー株式会社**  
〒651-0086 神戸市中央区磯上通7丁目1番5号



**フォルテオ**  
皮下注キット600μg  
テリパラチド(遺伝子組換え)注射剤  
— 骨粗鬆症治療剤 —  
処方せん 医薬品 薬価基準収載  
(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

FRT-A02(R0)  
2012.04

Hisamitsu®



※製品イメージ

劇薬、向精神薬、習慣性医薬品 (注意-習慣性あり) 処方せん医薬品 (注意-医師等の処方せんにより使用する)  
経皮吸収型 持続性疼痛治療剤

薬価基準収載

**NORSPAN®** **ノルspan® テープ** 5mg  
10mg  
20mg  
NORSPAN® TAPE プレノルフィン経皮吸収型製剤

●「効能又は効果」、「用法及び用量」、「禁忌を含む使用上の注意」、「効能又は効果に関連する使用上の注意」、「用法及び用量に関連する使用上の注意」等は製品添付文書をご参照ください。



製造販売元 (輸入元) [資料請求先]  
ムンディファーマ株式会社  
〒108-0075 東京都港区港南2-16-4



発売元 [資料請求先]  
久光製薬株式会社  
〒841-0017 鳥栖市田代大官町408

®:登録商標 NORSPAN®TAPE is licensed by MUNDIPHARMA

2012年10月作成



次世代セラミックシステム、誕生。  
**Aesculap® BILOX® Delta**

製造販売元

ビー・ブラウンエースクラップ株式会社

〒113-0033 東京都文京区本郷2-38-16 TEL.03(3814)2524 FAX.03(3814)6110

Aesculap-a B.Braun company.

**B | BRAUN**  
SHARING EXPERTISE

販売名: セラミックヒップシステム デルタ  
バイオロックス オプション ヘッド  
承認番号: 22400BZX00248000  
22400BZX00247000

balanSys Knee System

**MATHYS**   
European Orthopaedics

*...together with passion!*

日本人向けに開発された XS、S サイズを含む豊富なサイズバリエーション  
CR、UC (CS) および PS が用意され、軟部組織の状態に幅広く対応可能  
正確かつオペ時間の短縮に繋がる Swiss made の高品質な手術器械



販売名: balanSys トータルニーシステム  
医療機器製造販売承認番号: 22200BZX00709000  
販売名: balanSys UC インサート  
医療機器製造販売承認番号: 22200BZX00956000

株式会社 マティス 〒108-0075 東京都港区港南2-12-27 イケダヤ品川ビル  
Tel 03 3474 6900 (代表) / Fax 03 3474 6906

[www.mathysmedical.com](http://www.mathysmedical.com)

旭化成ファーマ

骨粗鬆症治療剤 薬価基準収載  
**テリボン®** 皮下注用56.5 $\mu$ g  
注射用テリパラチド酢酸塩 処方せん医薬品\*  
Teribone<sup>®</sup>Inj. 56.5 $\mu$ g ※注意—医師等の処方せんにより使用すること

「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量に関連する使用上の注意」等については製品添付文書をご参照ください。

製造販売元(資料請求先)  
旭化成ファーマ株式会社  
〒101-8101 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地  
URL <http://www.asahikasei-pharma.co.jp>  
2012.9



骨粗鬆症治療剤 薬価基準収載  
**エルシトニン®注20S**  
**エルシトニン®注20S ディスポ**  
Elicitonin<sup>®</sup>Inj. 20S Elicitonin<sup>®</sup>Inj. 20S Dispo

劇薬、処方せん医薬品\* (エルカトニン注射液)  
※注意—医師等の処方せんにより使用すること  
「効能・効果」「用法・用量」「禁忌を含む使用上の注意」等、詳細については製品添付文書をご参照下さい。

製造販売元(資料請求先)  
旭化成ファーマ株式会社  
医薬学術部: 〒101-8101 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地  
URL <http://www.asahikasei-pharma.co.jp>  
2012.9

 **astellas**



骨粗鬆症治療剤(ミノドロン酸水和物錠) 薬価基準収載  
**ボノテオ錠50mg**  
Bonoteo<sup>®</sup>  
劇薬、処方せん医薬品  
(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

■「効能・効果」「用法・用量」「禁忌を含む使用上の注意」等につきましては、製品添付文書をご参照ください。

製造販売 **アステラス製薬株式会社**  
東京都板橋区蓮根3-17-1  
[資料請求先] 本社/東京都中央区日本橋本町2-3-11

2012/07作成 A41/2.A.04



5-HT<sub>2</sub>ブロッカー 薬価基準収載  
**アンプラク**<sup>®</sup> 錠 50mg・100mg  
 細粒 10%  
 ANPLAG<sup>®</sup> Tablets, Fine granules (日本薬局方 サルボグレラート塩酸塩錠・細粒)

製造販売元(資料請求先)  
**田辺三菱製薬株式会社**  
 大阪市中央区北浜2-6-18

●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

2012年2月作成

経皮鎮痛消炎剤

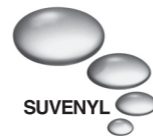
薬価基準収載

**モ-ラステプ**<sup>®</sup> 20mg  
**モ-ラステプ**<sup>®</sup> L 40mg  
 【ケトプロフェン2%】



○効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

資料請求先  **祐徳薬品工業株式会社** 学術研修部  
 福岡市博多区冷泉町5番32号 オーシャン博多ビル 8F  
 TEL.092-271-7702 FAX.092-271-6405



関節機能改善剤 薬価基準収載  
 処方せん医薬品<sup>注</sup>  
**スベニール**<sup>®</sup> ディスポ関節注 25mg  
 バイアル関節注 25mg  
**SUVENYL**<sup>®</sup> 精製ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液

注) 注意一医師等の処方せんにより使用すること。

※「効能・効果」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「禁忌」、「使用上の注意」等については最新の添付文書をご参照ください。  
<http://www.chugai-pharm.co.jp>

製造販売元  **中外製薬株式会社**  
 〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1  
 ロシュグループ

2011年7月作成